# 茨城大学五浦美術文化研究所報

第　10　号

岡倉天心先生筆跡

1 9 8 5

茨城大学五浦美術文化研究所

# 第十号発刊のことば

所長　西田　亨

昭和四十六年三月に所報第一号が発刊されてより、所員の継続的な御努力と事務当局の積極的な御協力により、今年度、第十号刊行の運びとなった。所報の刊行には種々の支障が伴うけれども、此を機に今後は更に内容の充実を期すべきであろう。

茨城大学五浦美術文化研究所に対する世の関心と評価は年を追って急速に高まっている。

昭和五十八年には五浦の遺跡保存に対して、山本有三記念第五回郷土文化賞が贈られた。貴重な資料の寄贈、展示会のための収蔵品借用等の依頼、報道のための撮影願い等も多く、遺跡参観者は年間五万人乃至八万人に上る。

事務当局の緻密な管理と所員の研究とが相俟って、遺跡及び収蔵品の完璧な保存、研究所の一層の内容充実と飛躍発展のあることを念願してやまない次第である。

終りに本号執筆者・編集者並びに関係各位に心から感謝の意を表します。

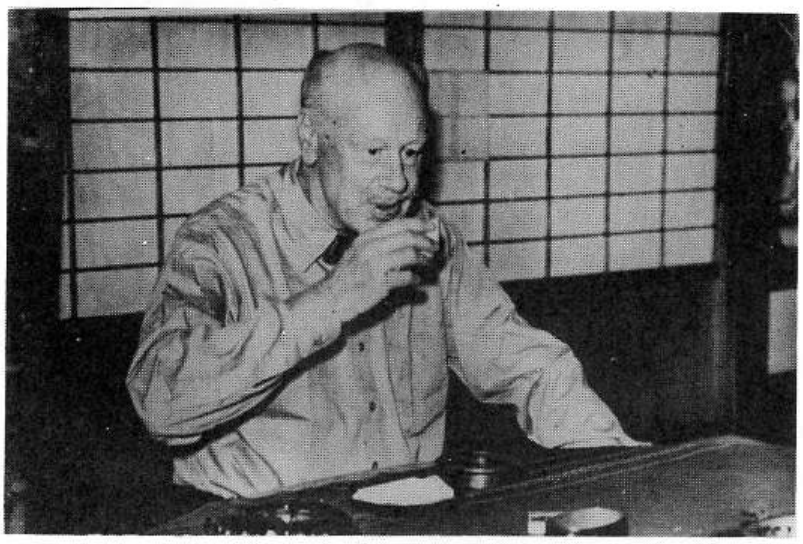
（昭和五十九年十二月）

# ウォーナー博士の功績をめぐる異説について

稲村退三

本学五浦美術文化研究所報第一号が発行されたとき、私は「ウォーナー先生の功績と日本文化財リスト」と題する一文を寄稿した。太平洋戦争中、京都・奈良をはじめ日本各地に散在する古文化財がいかにして戦禍を免れ得たかについて、アメリカのウォーナー博士が中心になって作成した「日本文化財リスト」を取り上げて論じたものであったが、その後この件についての私の認識が若干変化しているので、与えられたスペースの中で、問題を絞って私見を述べることにしたい。

太平洋戦争中、京都・奈良等、日本各地に散在する古文化財を米空軍の爆撃から救ってくれたのは、アメリカのラングドン・ウォーナーである。ということは、昭和二十年十一月二十日付の朝日新聞に矢代幸雄



在りし日のウォーナー博士

昭和21年5月27日朝，奈良市・新納忠之介氏の茶の間にて

先生が初めて公表して以来、少くも美術に関心を持つわれわれの間では常識となっている。しかるに京都の同志社大学のオーテス・ケリー教授は、昭和五十年九月一日発行の文芸春秋に「原爆を落とすな、ウォーナー博士は、ほんとうに京都を救った恩人なのか？」というタイトルで、京都を爆撃から救ったのは、アメリカの陸軍長官ヘンリー・L・スチムンソンである。と二十年間に及ぶ追跡調査の結果を三十一ページにわたって発表している。

同教授はアメリカのアーモスト大学の出身で、一九四七年に同志社大学に派遣され、同大学を新制大学に改革する仕事に従事した人であるが、その後昭和五十年八月一日、二日付の毎日新聞にも、「ウォーナー伝説の追跡 ―― 京都爆撃禁止命令を出したのは、スチムンソン長官 ――。と題した長文の論文を発表している。

私はこの人の文章を半ば興味と疑問を抱きながら通読したが、いささか奇異に感じた点があった。それは太平洋戦争中アメリカ軍部の秘密文書であった日本文化財リストの存在と、ハーバード大学付属美術館の東洋部長であった、ラングドン・ウォーナー博士が、ロバーツ委員会の主役として日本文化財リストの作成に貢献したことについて一言も触れていないことである。最初、事実を曲解しているのではないかとさえ思ったが、毎日新聞の記事の中で、ウォーナー先生の顔に泥を塗るつもりはないと断っているところをみると、物事を公平に判断して処理する人らしい。一方当のウォーナー博士も、死の直前まで、京都・奈良を救った名誉はマッカーサー元帥に行くべきである。云々と言い続け親友だった矢代幸雄先生を困惑させたほどの謙虚な人柄である。従ってオーテス・ケリー教授の見解も一応筋が通っているといわねばならないし、ウォーナー博士も、日本文化財リストを作成したのは自分たちであるが、京都・奈良の爆撃を中止させるほどの権限はなかったと、謙虚な態度を持している。

B29機による日本列島空襲の総指揮官がだれであったかは知らないが、米軍部の極秘文書だった日本文化財リストが、アメリカ空軍の爆撃指揮者に何らかの注意を喚起したことは、否定し得ない事実であろう。京都・奈良のみならず、東都では上野公園内の帝室博物館、東京美術学校の文庫、そして本郷台の東京帝国大学の図書館、同文学部の古文書類が、不思議に戦禍を免れたのは、やはりウォーナー博士のおかげであると思い込んでいるのは、私一人だけではないと思う。

ウォーナー博士はこのリストの序説で次のように述べている。「……日本は過去において地震や内乱があったにもかかわらず、多くの建築物や彫刻・絵画などがよく保存されている。インドや中国ではとうの昔に失われているのに、日本にはこれらの実例をみることができる。この日本列島は、文字通りまれにみる美術品で満たされた宝庫であると。優れた日本文化財を救うために、博士は必死の努力を傾けたのである。日本文化財リストの内容は、北は青森県弘前城から、南は沖縄の首里城に至るまで、百数十件の重要文化財を四等級に分け、機上からも識別できるように、地図を挿入したきわめて詳細なものである。

それにしても、どうしてあのような立派な文化財リストを作成し得たか？　われわれにとっては長い間のなぞであった。しかしそのなぞもその後解明する手掛りを得たので、ここに付記してご参考に供したい。

今から五年前の春だった。当時茨大美術科の大道教授が、奈良の新納忠之介氏のお宅から借りて来た「手紙を通してみたウォーナー」という

英文の書物（この書物はその後五浦美術文化研究所に寄贈されている。）の中に、問題のなぞを解くかぎがあった。この書物はウォーナー博士の教え子で、インディアナ大学の美術教授、セオドール・バウィ氏の著書で、いわばウォーナー博士の書簡集である。ウォーナー博士が某氏に宛てた手紙によると、博士が明治四十三年に来日して五浦の天心邸に滞在中、天心の指導のもとに日本の古美術について調査する機会に恵まれたことについて、次のように記してある。

日本政府は、一九一〇年英京ロンドンで開かれる日本古代美術展の開催準備を進めている最中であった。五浦の天心は政府から出品目録を作成するよう依頼を受けていた。ウォーナー博士の仕事は大変厖大なもので、すべての古美術品について写真を撮ったり、解説文を書かねばならなかった。美術品の寸法とか制作年代や神社仏閣の年代等の説明を、岡倉天心と中川（忠順のことか訳者註）が読んでくれた。特に天心は彼の分を英語で説明してくれた。博士はそれらを筆記し、次にそれをもっと詳しく敷延して、タイプで打つ。写真を挿入して三冊の分厚い書物になった。建築・彫刻・絵画・その他諸芸術品にはそれぞれ解説文を付した。博士は校正刷りに目を通し、書名・表紙・書物の大きさも決めなければならなかった。「日本の寺とその宝物」という書名は天心によって日本語で書かれ、あとで博士によって英訳された。この書物は古代日本美術について英文で書かれた最初のものである。

以上により、ウォーナー博士が日本文化財リストを作成するに当って何を参考にしたかが初めて分った次第である。

〔結び〕

一、ウォーナー博士が作成した「日本文化財リスト」が、米空軍の抑制にどれだけ効果をあげたか即断することはできないが、アメリカの軍部が相当の期間、秘密文書扱いにした重要文書であることは事実である。博士は日本の古美術を深く理解し、太平洋戦争中、その保護のために献身的努力を払われた事実を何人も否定することはできない。従って博士の没後、法隆寺の境内や、桜井市の児童公園に、ウォーナー記念塔を建設して、博士に対し国民的感謝の意を表したことに対しても、何ら異議を唱える理由はないであろう。

二、ケリー教授の論文は、京都に限って言及しているようだが、原爆投下のリストから「京都」を外したのは時の陸軍長官ヘンリー・L・スチムンソンであったとするオーテス教授の主張に対しても、敢えて反対する理由はない。おそらく京都市民も同感であろう。

（初代五浦研究所長）

法隆寺裏のウォーナー記念塔と筆者　（稲村）

# 五浦の松涛

## ―茨大五浦美文研三十周年によせて―

石原道博

「三十而立」（論語）という。わたくしたちにとっては長くもあり、また短かくもある。人生三十歳ともなれば、成長期から開花期に入るふし目として、だれしも懐古感今の情にひたり、過去・現在・未来について、いかにあったか、いかにあるか、いかにあるべきか、を三省せずにおられまい。

茨大五浦美文研が三十周年をむかえるということは、人生と同じく、こうした反省なしに慶祝はできまい。研究所もいろいろな困難をのりこえて今日あるわけであるが、その施設設備・管理運営については、人員と予算がついてまわるので、その責任者たちは、いつも人知れず苦労を重ねてこられたにちがいない。

昭和二十四年、新制茨城大学が発足したとき、わたくしは旧制水戸高校教授から、はからずも文理学部教授に任命されたが、新制大学に期待するものは、スクーリングが6533制から6334制にかわったことではなく、旧制大学に欠けていたものを補完する、新しい前進であった。新制大学が、当時〈駅弁大学〉などととかく軽視されるなかで、わたくしは最初から一つの信念をもっていた。いわく、地方大学には、かならずなにかその地方の特色を盛れ、と。したがって、東竜太郎学長からはじめて五浦美術研の話をきいたとき、「これで茨大にも一つの宝ができた」とよろこんだ。その後、都崎雅之助学長のお骨折りで〈天心記念館〉〈ウオーナー博士像〉なども建設され、研究所も、ようやく茨大の特色をしめすようになってきた。いま、外来者が茨大の特色ある施設を見せてほしいといえば、わたくしはまず五浦美文研に案内するだろう。

数年まえ、研究所の収蔵品が盗難にあい、あらためてその管理体制が反省された。人は病気や事故にあって、はじめて健康のありがたさと健康管理の必要を痛感する。研究所がこの三十年間、大過なくすごせたことはご同慶の至りで、たしかに感謝であるが、人はとかく困難より安易

につきやすいから、定着・安定がつづくとマンネリに陥りやすい。これを打破するものは、全所員のたえざる切磋琢磨であり、挑戦！そして創造への道である。

わたくしの所長時代、六角堂下の海岸を、護岸をかねて埋め立て、遊歩道をつくってはどうか、という外部からのはたらきかけがあった。これも観光に利する一方法かとも思ったが、わたくしは自然の景観保護の立場から、崖くずれなどの危険がともなわないかぎり、五浦の松濤は自然のまま、とこころに決めていた。

茨大の特色といえば、話はかわるが、学際的総合研究をめざす「霞浦・北浦研究所」の構想などは、ぜひ実現すべきものと、かねてから考えている。それはともかく、いま三十周年をむかえて開花期に入った五浦美文研の堅確な発展を、こころから祈りたい。

（茨城大学名誉教授・文学博士・第三代所長）

# 天心の墓に詣でたこと

大谷時中

所報第四号に所員の後藤末吉教授が「五浦の月―観月会の記」という一文を書きのこしている。おもえば、ことは既に昭和四八年の陰暦九月十三日にあたる十月十八日に催されたことであるが、この月見の会はいまも猶、私の脳裏をはなれない。それは五浦の月もさこそ、その折詣でた天心の墓にある。私がこの研究所に関係したのは、宮田俊彦教授が所長の頃で、教育学も一人ぐらい、いたらよいであろうとのことで仲間入りさせていただいた。時折の研究会は予測したごとく私に縁遠いものが多かったが、だんだん接触するにつれて関心をもつようになった。殊に、この観月会にさきだって当日の夕暮、所員一同そろって天心の墓所を訪れ、その霊前に接してからである。

仍て、天心の墓であるが、こんもり盛られたささやかな土の山で墓碑がみえない。その入口に「天心先生墓所」の文字をみなければ、恐らく何人も天心の墓であるとは気がつくまい。私は始めて天心の墓に接したこともあろうが強烈な奇異の感にうたれた。これが日本美術の改革に生命を投じ、また〝亜細亜は一なり〟と東洋の目ざめを啓蒙した天心・岡倉覚三の墓なのかと。然し後日その想いをあたためていくと、そのひともりの小さな土まん頭に意味をみいだした。

美術家のヴィンケルマン（J.J.Winckelmann, 1717～1768）は、且て古代的造形の本質を「その高貴な単純さと静かな偉大さ（edle Einfalt und stille Grösse）」にあるといったが、天心の墓がいみじくもそれを表象しているではないか。且て、私は西安を旅行した折、秦の始皇帝の陵に接した。司馬遷の史記によれば彼の墳丘は七〇余万人の徒刑者を使役して地下の水脈に達する深坑に銅板を敷きつめて墓室にしたということであり、しかもその近辺に彼を護衛するための兵馬俑を埋めた俑坑が発掘されて世界を驚愕せしめている。私もその雄大さに眼を見張った。そして、その雄大さの量には天心の一握の土まん頭は及ぶべくもない。然し雄大さではなく偉大さの質に於て天心の墓はヴィンケルマンの言葉のごとく、多くの示唆を我々に与えている。

宜なる哉、彼の〃茶の本〃には「花はわれらの不断の友」と談じ、破れ籬の前に座して野菊と語った陶淵明や、西湖の梅林を逍遥しつつ忘我の境に入った林和靖等の風雅を云々し、這般に光明皇后の御製といわれる「わがために花は手折らじされどただ　三世の諸仏の前にささげん」の一首を引用注記している。かかる深渕な哲学的芸術観に由来する天心の無我の胸懐が、五浦に学んだ碩学の美術家をはぐくんだであろうことを私なりに理解した。爾来、私は土饅頭の天心の墓に一層の敬愛を抱くようになった。

聽て来るべき新しき世紀には老いる者から枯れていくであろうが、若き世代が更に慧能を傾注して天心の土饅頭の墓に意味を創造していくことを期待する。

（一九八四・一〇・一〇）

（元所員）

# 『岡倉天心』の著者 斉藤隆三先生の思い出

瀬谷義彦

五浦と岡倉天心、あるいは日本美術院に関心をもつ人は別として、茨城県内でも斎藤隆三という名を知っている者は少ないだろう。マスコミの映像の波に乗る人でも、半年もその波から姿を消すと、すっかり忘れ去られる世の中であるから、斎藤先生のような、最もよき天心の理解者であり、日本美術院の再興に尽力された茨城県人であっても、大観や武山、周山のような画家でもない地味な学者を知らないのは当然かもしれない。

先年、茨城新聞社が『茨城県大百科事典』を編さんした時、私共も関係して人物の選定には大変苦心した覚えがあるが、その時私は斎藤隆三の名を、掲載人物中に加え、それを私が担当執筆することになったものの、今でも研究不足の説明に忸怩たるものがある。

その百科事典の斎藤隆三の項に私は、一八七五年（明治八年）生れ、一九六一年（昭和三十六年）没した「歴史家、美術評論家。現在の北相馬郡守谷町の旧家、斎藤為親の三男で、……茨城尋常中学校（現県立水戸一高の前身）から第二高等学校を経て一九〇二年（明治三十五年）東京帝国大学国史科卒業後……一九三二年（昭和七年）『江戸時代前半期の世相と衣裳風俗』の論文で東京帝国大学より学位を受け、本県でただ一人の文学博士となった。横山大観、小川芋銭らと親交厚く、岡倉天心亡きあと、日本美術院の再興に尽力、のちにその常務理事となったほか、天心偉績顕彰会専務理事、茨城新聞社取締役など、県内の各種の役員を務め……著書は、学生時代に出版した『守谷志』をはじめ数多く、『近世日本世相史』『大痴芋銭』『横山大観』『岡倉天心』『自叙伝』はとくに注目されている。」と書いたが、実は優れた日本美術史家であったことを、記すべきだったと反省している。

美術史家としての斎藤は大正六年春陽堂から刊行した『新美術史』の中で、天心の美術学校創立に関して、次のように述べている。

岡倉覚三の美術学校を率ゐて美術界に臨み、画界革新の旗を揚げて軍を進むるや、或は正道に出で或は奇道を踏み、荊棘を剪り沮洳を拓き、世の攻撃非難を意とせず、所信を断行して直に其の効果を収めずんばあらず。画壇為めに風靡し、勢天下を席捲せんとす。……加ふるに岡倉は詩骨稜々たる一個の天才にして、其の施す所常に痛快壮烈天馬空を行くが如きものありと雖も、亦一面には日夕の行動常規を逸するもの甚だ多く、人の非難の標的となること尠しとせず。……

このような冷静な立場から、天心を日本美術史上に位置付けようとした斎藤であったから、没する前年書かれた『岡倉天心』（吉川弘文館発行人物叢書）は、天心の真の姿を後世に伝える名著として、今日でも光彩を放っているのである。

現在私の書斎に、斎藤先生が学生時代に書かれた『守谷志』が、各種の『天心全集』などと並んでいるが、それをとって奥付の裏を開くと、「昭和二十八年七月三十日、暑さ酷しい日の午后、北相馬郡守谷町の御自邸に斎藤博士を訪れ、守谷町の歴史や、東大史学科創設当時の模様、明治時代の学者の風格などを偲ぶ御話を伺う、この書を贈らる」とペン書きで記してある。

今思うとそれは先生の晩年であり、私は当時創立まもない茨大の一教員として、夏休中に行われた小中学校の先生方の認定講習の講師として、県西地区の会場地に宿泊していて、余暇を利用してお訪ねしたように記憶している。先生は一後輩の私を快よく迎えて下され、初対面の若輩に、立派なご本の扉に達筆で「瀬谷義彦君恵存　斎藤隆三」とまで書いて頂いた。

今でも温顔の大先輩を思い出して有難くなるが、ただ一つ残念でならないのは、その頃恐らく先生が構想を練っていたのではないかと思われる前掲『岡倉天心』について、全然お伺いできなかったことである。しかし考えてみれば、それは私が当時天心については、それほど深い関心を持っていなかったためであって、若し私が質問さえすれば、先生からじかに天心について、生々しい話をお聞きできたのではないかと、後悔されるばかりである。

ともかく茨城の地にゆかり深い天心の、最もよき理解者斎藤隆三という美術史家が、茨城県人であったことに、私は誇りを感ずる一人である。

（昭和五十九年十月記）

（第四代所長）

# 新納資料のこと

大道武男

早いもので五浦の天心遺跡が茨城大学に移管されて三十年になる。五浦美術文化研究所も着々研究成果をあげ、その所報も今回で十号になる。急速に変貌してしまった五浦一帯の中で、研究所構内だけが旧観をそのまま残し、天心旧居を守って来たことは高く評価されていいことである。今後とも益々内容を整備し、末長くこれを守ると共に、充実した研究を世に問うべく努力を重ねられることを祈っている。

私が五浦に深いかかわりを持つようになったのは初代稲村所長が退官されて、二代宮田所長が任命されるまで暫くの間所長不在の期間があって、その間一切の事務処理が美術科に託されることになった頃からで、私は所蔵品の陳列、収納や来客の案内で五浦に出かけることが多くなった。その間に土地の古老から珍らしい思い出話を聞くことも出来たし、又貴重ないくつかの資料を発見することが出来た。しかし私が発見したものの中では何といっても一番大きかったのは新納資料である。

天心は日本美術院を改組した時、これを一部と二部に分け、一部が新らしい日本美術の創造、二部が日本古美術の調査研究と修理保存に当ることとし、その責任者に愛弟子の新納忠之介を当らしめ、これを奈良においた。天心はこの時新納忠之介を呼び「新納、お前は奈良で死んでくれ。」といったということが語り伝えられている。当時の日本文化財の荒れ方はひどいものだったようで天心はその救済の急務であることを痛感していたのである。しかし仏像修理ということはもともと地味な仕事であり、この第二部の業績は今日世間ではあまり知られていない。

私は奈良にはよく出かけるし、又日本美術史を担当していたこともあって、この美術院第二部の業績を調査して見ようと考えたのである。新納先生には学生時代古美術研修旅行の時、親しく奈良の寺々を御案内していただいた懐かしい思い出もあった。

今京都国立博物館の一角にある財団法人美術院をたずね、奈良雑司町の新納家にうかがったのは昭和四十六年十一月八日であった。前もって連絡してあったので房子夫人（忠之介長男忠男氏夫人）は気持ちよく迎

え入れて下さったのであるが、そこで拝見したのが新納家に残る書簡、写真等の厖大な資料であった。その中天心、ウォーナーの書簡約六十点と貴重な写真を拝借することが出来、これ等を所報第三号に「新納資料」として特集することが出来たのは望外の喜びであった。

新納先生は昭和二十九年四月十三日、八十七歳で世を去られたが、生涯に修理した文化財は二六三一件に及んでいる。天心の命で美術院第二部を任された先生は立派にその責任を果したのである。その修理の記録は今、新納家から奈良国立文化財研究所に寄託・保管されているが、和綴で厚さ四～五センチの冊子が何と四百冊にも及んでいる。そして今日尚仏像修理の仕事は財団法人美術院によって引き継がれている。

新納家にはその後も昵懇にしていただき、奈良に行く度にお寄りしていたのであるが、昨年房子夫人は京都に移られ、由緒ある雑司町の家は今武蔵野美術大学の宿舎として使われている。

（元所員）

# 岡倉天心の美意識とその遺品

荒木　修

つい最近、宮尾登美子が一弦琴を弾奏するのを見聞したが、なかなか見事であった。かつて高知市の寺田寅彦旧邸で秋沢夫人の演奏を聴いたが、その音色には土佐に流された憂愁の人の余韻を感じた。宮尾さんの音には女人の想念が籠められているように思った。

『茶の本』の第五章に伯牙の「琴馴らし」の話が紹介されている。天心は、五浦で琴馴らしを試みたのだ、とわたくしは思う。春草や大観は竜門の峡谷の桐でつくられた琴で、天心は弾琴の名手で、彼等弟子の特徴を生かし、その特長を伸ばし、天下の名琴たらしめた変幻の名工、能師であったわけだ。

六朝の非職、嵇康には「濁酒一杯、弾琴一曲」の句があり、唐の非職、王維には「獨坐幽篁裏、弾琴復長嘯」の句があり、漱石はこの句を『草枕』に引いている。王維も漱石も、ともに画をたしなむ人であった。琴は孔子も愛し、俗情を制し、心を一点に集結せしむるところに、その張りのある音色がある。「茶」の味も正に同じく、天心説くところの「茶の本」もまた「茶」の俗悪拒否、単一無雑の意義を主張している。

天心が日本美術院の五浦移転を考えたのも正に、この俗悪拒否、単一専心を狙ったものと伝えられる。天心は「屈原」の画の水仙を高く評価したが、ここに彼の仙人思想をも見ることができる。由来、道教の根幹は僊人思想である。ここには永遠の生命への願いが籠められている。孫文は字を逸仙、日本亡命中は中山樵と称した。樵とは山の仙人の意である。字は他人に呼んでもらう名である。宋の邵雍は安楽窩に居り、安楽先生と号し、微醺詠詩、「漁樵問對」「伊川擊攘集」の著がある。「天心」の号は、彼の静坐風月を詠じた脱俗大悟の詩から採ったものと考えられる。孫文も豪放かつ繊細の革命人であった。天心も、一面豪放、一面繊細、静動変化に富む、芸術界の革命児であった。

彼は欧米において、故意に和装で出没したが、そうするためには英語を立派に使える者でなくてはいけないと言った。彼の五浦を選ぶについても、太平洋の雄大さと、五浦海岸の奇景と笙鼓洞ほかの海潮音、松籟

の魅力を考えたに違いなく、六角堂静坐室は正に、その頂点に立つものといえよう。

わたくしは、十一月五日、天心記念館に天心遺愛の品々を訪ね、いよいよ彼の美意識の非凡さに打たれた。

崑崙の釜（唐銑）、急須（黄銅）、七宝鞘入箸、小刀、棗（黒無地）、煎茶茶碗の造型・装飾・色調の素晴らしさは前々承知するところであったが、今回あらたに痛感したのは、六角紫水作の木製蒔絵の蓋つき椀と衣桁、羽織、下駄である。六角紫水作の二点についていえば、椀の大きさにスケールの大を好む天心の趣味を思い、その黒ずんだ漆の色調に天心の「玄道」道教の精神を見た。衣桁は二段物で黒地に金の蒔絵の蝶をあしらったもので、上段の張りに、そして下段に袴という工夫に、あるいは天心の独創的発想によって紫水が作ったのでは……と考えてみたが、実状は果たしてどうであったか。籐貼桐駒下駄の裏に、白山の越後屋の紙のシールがあるという説明で、この下駄が天心毎日の使用でなく、デモンストレーション用であったことが察知できる。彼の神出鬼没の国際的演出のあとが窺えて興味深く感じられた。また、硯に水を垂らすために使ったと思われる黒いスプーンの形の珍らしさにも眼を惹かれた。蠟石の印の字は「剛」だと思うが、これも解説札に記載されるとよい。とくに端溪荷葉硯は見事なものである。荷は蓮のことで、見事な蓮の葉の彫がある。解説の文字が細字で、ガラス戸越しでは十分に読み取れなかったのが残念だが、拙庵、杜庵の伝承を持つだけに稀代の逸品と思われた。

天心は「美術思想ヲ流布シ卑賤高尚ノ別ナク天地万物ノ美質ヲ玩味シ、日用ノ小品ニ至ルマテ思想ヲ歓悟スルノ具ニ供セシムルニ若クハナシ。」（平凡社、『岡倉天心全集』第三巻一一ページ）と言っている。

十一月七日から九日までの三日間、茨城大学学内における収蔵品展示会が行われたが、五浦を訪れる人も学内展示を見る人も、天心の遺品を見て、白色の板に書かれた記事を参考にして天心の美意識の水準と志向されたスピリットを悟り、おのがじし生活の質と今後の問題とを改めて考えられることであろう。

最後になってしまったが、丹念に解説を施された茨城大学五浦美術文化研究所の所員ならびに関係者各位に心から感謝し、所員各位の研究と業績とが、ますます広く理解され、評価されることを期待しつつペンを擱くことにする。

（一九八四、一一、一〇）

（第六代所長）

# 研究所の思い出をめぐって

岡田忠軒

私が研究所所員に加えて頂いたのはごく短期間に過ぎず、研究所はもちろん、その活動とのつながりはごく稀薄なので、ここにしるすほどの思い出のないのが残念だ。が多年絵画彫刻の手すさびと鑑賞を趣味としてきたので、美術専門所員との接触から多大の新鮮な楽しい刺戟と啓発を得たことは感謝に耐えない。

五浦には一度だけ訪れた。人文学部発足の時期に教職員がうちそろい、バスで天心遺跡を見学に行った。私も参加して初めてその地を踏んだ。屋敷跡と研究所は閉鎖中で、ついに内部は見せてもらえなかった。ひろびろとした海岸を予期していただけに、海に迫る崖の中腹にある邸と、とくに圧倒的な量感をもって包囲する海洋の波濤にのみこまれそうな六角堂に強く印象づけられた。（記憶の情景は実際とはいくらか違うかもしれない）暴風雨のとき襲いかかる波浪は六角堂を埋めつくす激しさだろうと想像された。実際そのための破損から修復が施されている。ちょうど陸地と海の極限の接点。そこから広がる海は無限大の宇宙につらなり、それを真っ向から見据え、挑戦する勇猛心が天心の芸術を支えていたと思われる。真理は自然と人間との対決闘争と、相互浸透の中に直観されるものだが、この絶対宇宙に漂うような六角堂は瞑想によって真理に達しようとするのに、こよなき地点といえる。ここで天心は坐禅を組んだという。こんなぎりぎりの境界点にその場所を設定した着眼に驚き感銘する。そこに彼の真理希求の一念が読みとれるし、また彼が凡庸な芸術家でなかったことを示す一証左でもある。

詩は人生の批評である、といったのはマシュー・アーノルドだが、批評とは人生に対する問いかけ、解釈、思想の表明である。美術を含め芸術一般は広義の詩である。人生への問いかけは、それを包む宇宙、あるいは自然へのそれであり、その問いかけが芸術の基底を流れているとき、初めて単なる技術技巧を越える。自然の外面を忠実に器用に型どり、写すだけでなく、そのよりどころを絶対宇宙への問いにかけ、換言すれば人生の秘奥への追求があってこそ万人の心を打つ芸術作品が生れる。

それが批評であり解釈で、作品を通じて一般鑑賞者の情緒知性に訴えられる。つまり芸術はそのまま教育の力となる。だからワーズワスは詩人は教師だといっている。近来、日本社会のソフト化が流行語となりつつある。物質的生産の量的拡大をのみめざしてきた我国がその限界に気づき、未解決の諸懸案を包蔵しつつも総体的に豊富と繁栄を達成した充足感から、願望の変化、価値の転換を招いたためだ。生産第一主義から初めて関心が質の充実に向けられ、人間の心の問題が考えられだした。

ラスキンによれば芸術はそれを生む社会の反映であり、「腐敗した社会は純粋な芸術を生み得ない」という。現代の日本美術を例にあげれば、巧緻繊細は完璧に発揮されているが、旺盛な生命と冒険を欠くのが一般的傾向、というのが欧米の美術関係者の一致した見方だと聞く。我国の現代社会が多くの頽廃と異常さを示していることは否定の余地がない。美術が、そして芸術一般が頽廃と衰弱の徴を示しているかどうかは私ごとき者の判断の限りではない。が、ラスキンが「勤労なき人生は罪悪であり、芸術を欠く勤労は獣性そのものである」といったように、勤労第一主義だった現代日本が人間性の欠如を至るところに示し、粗野、猥雑、露悪を横行させていることも事実だ。こんなとき人生と社会に果す芸術の役割を考え直してみることも大切だろう。

せっかく天心の貴重な遺産があることだから、一般教職員と一般学生にもっと近づけ、生かす道を考えたいものだ。日本文化の充実と深化のために手近の大学の成員と地域住民の感性情緒の訓練をめざして研究所関係者の一工夫を望みたい。むろん収蔵品の展示は御努力の表われとして敬意を表するしだいである。

（元所員）

# 五浦美術文化研究所報十号への足跡

後藤末吉

所報発行もめでたく十回目を迎えることとなった。第一号発行から編集作業に深く関わりあった者として、感慨を禁じ得ない。所報のそれぞれのページにひとつひとつ思い出があるが、紙数の関係もあるので、主な点について述べて見たい。

所報刊行の計画が所員会議の議題になったのは、昭和四十五年五月十九日である。この会議の通知書には、

議題 (1) 研究所の名称変更について
(2) 名称変更に伴う関連諸規則の一部改正について
(3) 研究紀要の刊行について
(4) その他

とあり、五浦美術研究所から五浦美術文化研究所への名称変更と並んで研究紀要発行案が検討されている。続いて同年九月八日の所員会議では紀要第一号を『ウォーナー像完成記念』号とすること、B5判とし、文字の大きさを9ポとすること。一〇〇ページを見込み、一〇〇〇部発行を決定している。

十一月二十六日の所員会議の通知では

議題 (1) 所報の編集について
(2) その他

となって居り、冊子の名称が、『研究紀要』から『所報』へと変ったことがわかる。

併任の所員だけでなく、専任の所員を持つ法制上の研究所にしたいという願いから、当面、所員の研究成果を研究紀要の形で蓄積したいというのが、発行の目的であったが、研究所の種々の報告を別刷とすることの経済的問題や、研究論文以外のものをも掲載できるようなものにしてはどうかとの意見などがでて、所報の名に落着したと記憶している。

大道所員を中心に編集作業は進められ、所報第一号は、昭和四十六年三月二十日付で発行された。薄茶色の表紙をめくると、橙色の見返し、平安時代の襲色目（かさねのいろめ）の趣である。

一〇六ページの本文は、大塚巧芸社の印刷で、並の研究物とは違って、さすが美術文化を表看板とする研究所のものとの印象が強い。前年の三月二十一日に除幕式を挙行したウォーナー像完成を記念し、ウォーナー博士に関わる論文、報告、記録を多数収めている。（後段の目次参照）寄稿者も学内のみにとどまらず、都崎雅之助元学長、ウォーナー像の製作者平櫛田中氏、美術史家矢代幸雄氏、研究所初代所長稲村退三氏、岡倉天心遺族の知人上村嘉夫氏などが、名をつらねている。

所報は四号までは毎年発行を続けたが、経済的理由から五号以後は隔

年発行となった。印刷も大塚巧芸社による活版印刷は四号で打ち切られ五号からは、現在の写真植字による印刷へと切りかえざるを得なかったのである。

第八号の平櫛田中追悼特集、第九号の岡倉天心生誕百二十年記念特集も忘れ難い。それぞれの所員が、編集部の要望に応じて執筆、総合研究的な所報として世に問うことができた。五浦美術文化研究所が、天心遺跡保存の目的と共に、研究機関としての機能をも十分に果たし得ている証しと言えよう。昭和五十八年三月、本研究所が『山本有三記念郷土文化賞』を受賞したのは、遺跡保存に対する功績を対象としているが、単に物の保存のみに留まらず、研究と啓蒙の働きを通して、郷土文化に貢献していることが、その一助となっているものと感じている。

学外者の論文等を掲載することは、二号以後も必要に応じて行なわれた。所員の研究論文を主体とすることは当然であるとしても、内容によって、本研究所の目的にふさわしいと考えられる場合には、学外者の研究活動等を紹介することも、良いのではないかという考え方である。三号の上野直昭先生『天心先生の講義』、松田権六先生の『批評と伝統』九号の清水英夫先生『岡倉家の墓について』などは、いずれも他に一度発表した文ではあったが、あえて再録したのもその理由からである。天心遺跡の茨城大学移管後、管理整備に尽力された都崎雅之助先生には、たびたび寄稿して戴いたが、昨年故人となられたことは残念であった。初期の研究所運営委員であった伊豆山善太郎先生には、二号と九号に、それぞれ『茶の本』に関する深い研究を披露して戴き、所報の重みがぐんと増している。歴代の研究所長には事あるごとに寄稿をお願いした。大学を離れてのちも、それぞれに五浦を想う気持は厚く、快く応じて下さったことは、編集担当者として心強い限りであった。特に研究所草創の時期に基礎作りに奔走された稲村初代所長が、大学を去って二十年になろうとする今日もなお、五浦美術文化研究所を案ずる姿には頭が下がる。稲村先生が、定年退官の直前、多忙の中の貴重な時間を費して編集した『天心記念館開館記念』誌は、所報の前身ともいうべきもので、今でも所報編集の道標として活用させて戴いている。宮田二代所長の提案によりスタートした所報の編集を、見事に軌道に乗せた大道先生の、五浦にかける情熱もまた稲村先生に劣らぬものと言えよう。その他多くの先生方が退官後も五浦を見守り、時には求めに応じて執筆の労を執られる。現役とOBの強い繋りの中で編集業務を続けて来た自分は、幸せであると実感している。

所報編集のため、滋賀県大津の三井寺法明院を訪れ、フェノロサとビゲローの墓の撮影に当たったこと、奈良の新納家で写真や手紙を撮影した思出、天心記念館に収納してあった収蔵品を撮影したこと、思い起こせば限りない。所報を飾る五浦の風景を、折々にスナップしたことも、その時の風の動きまでよみがえって来るようである。手伝の立場で関わり始めた編集の仕事であったが、仕事を通して先輩諸先生の情熱に打たれ、五浦に対する関心は自ら高まって、自分でも論文を書こうとする気持にもなったことは、最大の収獲であったかも知れない。

研究所が発足してから三十年、所報が誕生してからも十五年になろうとしている。新聞・テレビ等で数多く報道され、年々参観者が増している五浦美術文化研究所であるが、研究面でも全所員の協力の成果が、所報の形をかりて現われ、ますます発展することを期待している。

発行のたびに全国の研究機関へ送り、多くの研究者の眼にふれている所報の、内容を回顧する意味で、一号から九号までと、天心記念館開館記念誌の目次を掲げる。

# 既刊所報目次

## 第一号（昭和四十六年三月二十日発行）


図版　岡倉天心先生・基子夫人遺影　六角堂
天心旧居　研究所で制作に励む
天心記念館　記念碑　天心先生墓所　4
発刊に際して　関　誠一　6
五浦美術文化研究所所報刊行によせて　都崎雅之助　7
発刊の辞　宮田俊彦　10
ウォーナー像の制作をめぐって　平櫛田中　10
ウォーナー・リストをめぐって　矢代幸雄　12
ウォーナー先生の功績と日本文化財リスト　稲村退三　22
ウォーナー氏に「時頼」の幅と
アルバム「友千鳥」を贈った経緯　上村嘉夫　38
「ウォーナー・リストの戦後」によせて　石原道博　41
五浦の松籟　巻島友治　60
桜井のウォーナー報恩塔をたずねて　大道武男　60
天心と露伴　宮田俊彦　60


## ウォーナー博士像完成記念特集


図版　ウォーナー博士像全景　銘文　題額　77
ウォーナー博士胸像2葉　78
ウォーナー博士功績顕彰記念胸像除幕式次第　79
ウォーナー博士胸像除幕式にあたって　岩上二郎　79
経過報告　矢口敬司　80
祝辞　坂田道太　82
同　安田靫彦　82
同　富田幸次郎　83
同　アメリカン・文化センター　85
祝電　86
除幕式参列者名簿　86
ウォーナー博士功績顕彰会発起人　88
同　賛助会員　88
図版　ウォーナー博士肖像写真と筆蹟　89
完成近いウォーナー博士像を囲んで　89
除幕式スナップ2葉、除幕式出席者　90
ウォーナー・リストの写真6葉　91
ラングドン・ウォーナー博士年譜　93


## 研究所紹介


図版　六角堂遠望　研究所地図2葉　95
茨城大学美術文化研究所沿革　96
同　参観心得　97
同　収蔵品目録　98
あとがき　106

## 第二号（昭和四十七年三月二十日発行）


口絵　岡倉天心先生肖像と筆蹟　1
彌勒菩薩像胎内願文　日本美術院血脈図　黄瀬戸花入　2
五浦　3
潮花瓶　活人箭　国宝修繕請負契約書　4
天心先生の茶書について　伊豆山善太郎　6
新納忠之介先生を偲ぶ　大道武男　13
元代以前の日本美術　石原道博　29
岡倉天心英訳『修習止観座禅法要』　宮田俊彦　48
研究所短信　88
口絵解説　88
快慶作　弥勒菩薩像について　89
収蔵品目録（追加）　89
参考図書　90
あとがき　92


## 第三号（昭和四十八年三月二十日発行）


口絵　岡倉天心先生肖像　1
熊野速玉神社にて　新納忠之介宅にて　2
法隆寺金堂にて　正倉院附近にて　夢殿にて　3
天心・大観・ウォーナー書簡　4
天心先生の講義　上野直昭　6
批評と伝統　松田権六　13
五浦美術研究所の由来　都崎雅之助　19
模刻百済観音余話　稲村退三　22
新納資料　24
明代の日本美術文化論（上）　石原道博　68
富田氏宛天心書簡　85
鈴木氏宛日本美術院招待状　89
滝田浩氏所蔵横山大観書簡　89
県立図書館蔵横山大観書簡　90
研究所短信　94
五浦美術文化研究所一年の歩み　94
新収蔵品　95
あとがき　96

## 第四号（昭和四十九年三月二十日発行）


口絵　天心先生レリーフ　白狐プリント表紙
ディッキンソン嬢への献辞　天心草稿
ガードナー夫人邸の来客名簿　指導札
天心遺愛品　観月会記念写真
帯　大観先生像下絵　秋景

未刊の岡倉天心先生資料　宮田俊彦　10
明代の日本美術文化論（中）　石原道博　34
五浦の月　後藤末吉　44
天心旧居の補修について　中田守夫　46
五浦美術文化研究所一年の歩み　46
あとがき　47


## 第五号（昭和五十年八月一日発行）


口絵　岡倉天心先生肖像　平櫛田中作
小春（一双）　木村武山作
三猿図（下絵）　下村観山作
道成寺　今村紫紅作
木彫飛天像　安田靫彦作
屈原（厳島神社蔵）　横山大観作
天心遺愛品　椀（六角紫水作）、銅製急須、箸・小刀
（特に註記しないものは本所所蔵品）

横山大観の絵「屈原」の理解をめぐって
— 天心・大観研究序説 —　荒木修
明代の日本美術文化論（下）
— 日中美術文化の交流・第四部 —　石原道博
エルミタージュ美術館考　荒井信一
「筑波の道」について
— 古河市郊外に眠る猪苗代兼載 —　山口正
画家とイメージ　西田亨

資料紹介
岡倉覚三追悼文（英文）
— ドイツ、ベルリン「極東研究」誌第二巻第四号、一九一四年 —
新収蔵資料紹介
五浦美術文化研究所昭和四十九年度活動報告
(1) 昭和四十九年度五浦美術文化研究所のあゆみ
(2) 昭和四十九年度参観入場者数一覧
(3) 所員会議の記録
(4) 所員研究会の記録
あとがき

## 第六号（昭和五十二年三月二十五日発行）

口絵　五浦釣人像
筆立　墨壺　雅印
曠野　普門品併図観世音菩薩
海　横山大観使用の筆　中村敬宇書


第六号発刊に際して　瀬谷　義彦……1
五浦美術文化研究所二十年の歩みの中で　都崎雅之助……2
天心先生「萬里の長城」の英詩　宮田　俊彦……5
清代汪鵬の日本美術文化論　石原　道博……9
富田幸次郎先生を偲んで　緒方　廣之……25
付　富田幸次郎先生の経歴と業績
シルクロードの旅　稲村　退三……37
野外彫刻について　後藤　末吉……63
彙　報……84
あとがき……86


## 第七号（昭和五十四年三月発行）

口絵　新海竹蔵作石彫レリーフ
二見形文台　下駄　棗
大観使用絵具
大観画清水六兵衛作水指


第七号発刊に際して　瀬谷　義彦……1
菱田春草と王昭君　豊崎　卓……2
大観と京焼　北岡甲子郎……4
岡倉天心における弧高寂寞
永久生命の意識と東洋の伝統的芸術精神　荒木　修……8
秋元双樹・酒汀・梧樓
一茶・天心・漱石の雅友として　大谷　時中……20
若き日のウォーナー　大道　武男……41
五浦美術文化研究所における文化財保存
短信……59
彙報……60
あとがき……63

# 第八号（昭和五十六年三月二十五日発行）


扉　『鶴鼎』

口絵　平櫛田中先生『無矣無矣』『禾山笑』『烏有先生像』『転生』『岡倉天心像』『源頼朝像』『鏡獅子試作（裸像）』『五浦釣人像』『鏡獅子』の彩色をする平野敬吉氏『五浦釣人』完成記念展にて

上梓の言葉　豊崎　卓……1

平櫛田中先生美術院葬の記……3

平櫛田中先生と茨城大学　都崎雅之助……4

平櫛田中先生車中談　稲村　退三……7

平櫛田中翁を偲んで　宮田　俊彦……10

百七歳平櫛田中　石原　道博……11

平櫛田中翁の胸像　瀬谷　義彦……15

平櫛田中先生　宮澤　治正……16

平櫛田中先生を偲ぶ　大道　武男……19

彫琢の書　巻島　友治……22

田中美術館参観記　西田　亨……24

平櫛田中先生宅訪問記　西田　亨……26

ウォーナー像の前に立ちて　山崎　猛……27

平櫛田中先生と山種美術館　北岡甲子郎……29

平櫛田中と西山禾山　河内　八郎……31

平櫛田中の彫刻について　後藤　末吉……35

茨城県関係の平櫛田中作品（彫刻）　後藤　末吉……48

平櫛田中作彩色彫刻抜粋　後藤　末吉……57

平櫛田中彫刻収蔵機関と収蔵品目録……61

平櫛田中年譜……後藤　末吉……64

西郷孤月遺作展展記事……荒木　修……82

彙　報……83

あとがき……90

# 第九号（昭和五十七年十二月二十六日発行）

口絵　六角堂　研究室（天心旧居）　岡倉天心の墓（五浦）


天心生誕百二十年記念特集号　発刊の言葉　所長　西田　亨……1
天心生誕百二十年記念特集号の刊行によせて　茨城大学長　黒木剛司郎……2
天心茶書再考　伊豆山善太郎……3
五浦回想　稲村　退三……15
天心の阿育王観　宮田　俊彦……19
岡倉天心の映像　石原　道博……23
岡倉、新納両家のお墓にお参りして　大道　武男……34
特別寄稿　岡倉家の墓について　清水　英夫……36
岡倉天心の研究批評と橋本雅邦の研究批評　荒木　修……42
「茶の本」について　岡田　忠軒……48
岡倉天心の日本英学史上に於ける特異性その他　黒沢　博……55
岡倉天心と博物館　茂木　雅博……59
天心と道教・禅　森　啓……64
天心の中国認識―「支那南北の区別」をめぐって　鶴間　和幸……70
天心とインド美術　後藤　末吉……84
岡倉天心の「泰西美術史」講義の検討　森田　義之……106
天心と書　川又　正……129
晴湖の中身　西田　亨……143
五浦の思い出　島田きち（談）……155
小峰家の墓を訪ねて　後藤末吉・川又正……155
彙　集……158
あとがき……164

# 天心記念館開館記念（昭和四十二年三月十日発行）目次


表紙題字　関南沖筆
扉　表　天心記念館名標　平櫛田中筆
　　裏　木彫五浦釣人像　平櫛田中作
図版　岡倉天心先生・基子夫人遺影
　　工房における平櫛田中氏
　　式典場スナップ・祝宴場スナップ・研究所構内スケッチ
刊行のことば　二方義
天心記念館由来　都崎雅之助
開館式式次第
経過報告　藤田忠
天心記念館開館式あいさつ　都崎雅之助
○祝辞
同　灘尾弘吉
同　安田靫彦
同　富田幸次郎
同　タゴール大学長
同　岩上二郎
同　片寄富七
天心先生の思い出の話　平櫛田中
○寄稿
天心遺跡について　東竜太郎
五浦随想　伊豆山善太郎
ASIA IS ONE　石原道博
天心の「天」　宮田俊彦
ボストン美術館の思い出　柏原孝夫
生きている史蹟　瀬谷義彦
「五浦釣人」完成記念展を観て　稲村退三
○図版　天心記念館内部その他計二十四葉
式典に参列して（参列者氏名併記）　稲村退三
○雑記
収蔵品目録
五浦美術研究所沿革・位置環境
天心岡倉覚三先生年譜（五浦時代）
あとがき　T・I生

# 五浦と天心

後藤末吉

## 序章

My dear Komachie　都には暑さ日に増り候事と存候　早くく御出可被爲候　此処千里一碧　海の色も松の緑をそへて涼さたとへん方なく寄せ来る波の砕けし雪に夏猶寒く覚え候　早くく来るべく相待申候　此程皮膚の病も最早愈へ申候間安神被下へく候 Mamanも大に元気にて子供一同楽しく日を送居候　海水にのみ身を涵し居海法師の種類に相成候　唯困難なるは蠅と米に候　今日剣持氏帰り御話可致候に付急に米一二俵御廻被下度　蠅取蛛蜘一万匹程小包にて至急御廻し被下候様たのみ候　独りにて凄しき事はなきやと案じ申候　如何候

八月六日　父より

高麗子へ

ガーゼ　ペッパー等唯今着致候　乍手数新聞御廻し被下度

明治三十六年夏、五浦に別荘を求めた岡倉天心が、愛嬢高麗子へ宛てた手紙である。五浦の景観に惚れこみ、最愛の娘に早く五浦へ来いと促す天心の気持が、行間に溢れている。米や日用品の入手に不便、新聞もない。押し寄せる蠅に悩まされながらも、五浦の生活に心はずませている天心の姿が眼に見えるようである。

## 第一章　五浦移転

### (一)　五浦の発見

天心が晩年の十年間、そこを本拠地として活躍した五浦（現茨城県北茨城市大津町五浦）は、その景観の美と、日本美術院の一時移転という事実により、全国的に名を知られている。天心が五浦に土地を求めた経緯については、天心自身の書き遺したものがないが『日本美術院史』（斉藤隆三著）には、飛田周山の談話が掲載されて居り、かなり事実に近いものと考えるので、全文を引用したい。

当時の天心先生に対しては、美術院全員、何れも絶対的の尊敬をもって対して居りましたもので、特に私共研究会員であったものなどは唯お出会ひしました時に敬礼する位のもので、お話などをいたしましたものではありませんでした。それが突然　今度磐城（いわき）の平の附近で景勝の地を世話をしてくれる人があるので、其処まで君に案内して貰いたいといはれたのですから当惑しました。私は茨城の北の方のものではありますが、平方面は皆目知らないし、それに土地の案内など出来ますものではありませんので、固く御辞退したのですが、ドウシテも

オマイ往けといふことでお供することになりましたのです。五月の初めの頃でもありませうか、上野駅から常磐線（註1）の汽車に乗ったのですが、先生は印度から還られたばかりの御様子（註2）で、髪は蓬々、色は焦げて黒く　それに頭には風帽を戴き、身には道服を着け、六尺に余る竹の杖を手にするといふ有様なので、人は皆目を聳てたものです。私は三等の切符を求め、先生には二等の切符を買って差上げましたが、アナタ三等ですか、ソレデは私も三等で、といふことで三等へ御乗込みでした。先生は二等車はお嫌ひで、一等か然らずんば三等といふお建前のことと承りました。それで平の駅に着きますと、何しても異様の風装ですから、町の子供が集って、ワイワイ附いて来る始末です。先生は平然たるものですが、私は困りました。その晩は平に一泊しまして、翌日目指して来た草野といふ海岸にお伴しましたが、これは一面の白砂青松、唯今では新舞子などいはれて居ります所で、景勝の地でしたが、先生は一向にお気に入りません。帰らうといふことになったので、私は、私の郷里の近くに五浦といひまして、五ツの浦を爲して居る所で、人里から全く離れた景勝の地があると申しましたら、それでは帰りがけにそれを見やうといふことで、綴の駅（註3）で汽車を降り、勿来の浜から平潟、長浜の白砂を徒歩で悠々と運び、草を踏み分けて、五浦の地までやって来ました。前面は怒濤躍る荒海、背後は松の生ふる丘陵の起伏、それに囲まれて先生のお邸になりました千三百坪だけが唯一つの平台で、海に突出して居りました所、柴田善作といふ人が初めそれを見つけ出して、生簀の料理屋のやうなものをやり初めたのですが　平潟からも大津からも七八町の山越の場処といふので、料理屋など立ちゆく筈はありません。自然荒廃に委せられて居た所です。其処に先生が来て見るなり中央の草原にドッカと腰を下ろし、これはよろしい、ここにきめます　飛田サン、スグに此処を買って来て下さい、といふ始末、之れには又全く面喰いました。官地か民地か、又民地にしても誰の所有か分りもしませんし、又当時一書生の私の身では土地の買方などドウしてよいか知りもしませんので全く閉口しましたが、兎に角先生の思召が分りましたので、私は近所に郷里がありますので、其処に居る父に話をして、父の名義で第一にその土地を買い求め、更に前面の海上に突出している山地まで、それが他日他人の有になってヘンな家でも建てられたら、この邸地の景色はなくなるといふので、それまで買ひ取り、すぐにお住いの家屋を建てる、早速に御移りといふことになったのです。先生が五浦をお求めになった始末はこんなことです。それが二年後には更に進んで、日本美術院の移転となり、横山下村両先生や菱田サン木村サンまで打揃ふての移転といふことにまでなりましたのです。

（飛田周山氏談）

『日本美術院史』の初版が出されたのが、昭和十九年三月二十日（創元社刊）であるから、周山の談話は恐らく昭和十八年になされたものであろう。生き生きとした描写であるが、四十年前の想出だけに、一部に記憶違いもあるだろうと考えられる。文中の柴田善作は柴田稲作の誤りだし、日本美術院の五浦移転は、天心が土地を購入した二年後ではなく、三年後の明治三十九年である。

岡倉一雄著の『父岡倉天心』昭和四十六年中央公論社刊（昭和十四年聖文閣刊『父天心』の復刻）によると、天心の五浦土地購入の経緯について、周山談と多少異なった描写をしている。

同年四五月のころ、天心は飛田周山を東道の主として茨城、福島の海岸地方を経めぐっていた。その目的は、もし適当な景勝地があるならば、住むべきところを求めるにあったらしい。周山の郷里茨城の磯原辺を手始めに、福島県四倉に近き草野駅地方まで歩を延しさまよい歩いていた。そして帰途、大津町の八勝園旅館（註4）に投宿し、ここを根拠として好きな海釣りに日を送りながら、附近の勝地を物色するのであった。検分して歩いた中で、草野駅附近は平坦な松原で、海岸はことごとく白砂がつづいていた。そこなれば坪一円以下という相場で買いいれることができて、地域もすこぶる広闊であったが、事実あまり天心の気にはいらなかった。釣りにもあいた彼は周山を促して、なおも附近の海岸をみずから検分して歩いた結果、候補地にあがったのが、大津町の東方八町ばかりの丘をへだてた海岸に斗出している五浦の地であった。幸い周山の親戚である万屋の鳥居塚という青年が、はじめて天心を案内して、五浦探勝にやってきたのであった。

五浦というところは、五つの湾入があり、岩礁に富んだ海岸で、つねには波おだやかな勝地である。そこで奇勝というべきは北の蛇頭、中央の笙鼓洞、大五浦の棚磯等であり、附近に昔、水戸黄門が茶の湯の水に汲んだという由緒の黄門の井などもある。明治十五年のころ、多賀郡木皿村の人柴田稲作がここに住を卜し、水産業を営んだとき、はじめて開かれた土地で、柴田その人が建てた観浦楼という二階建てが、その時なお海岸の岩礁の上に残骸をとどめていた。天心は一見して、この海岸に執着を感じ、雨を冒しての視察だったにもかかわらず、小五浦の南面に峙つ磯山の上に腰を下ろして、二三時間、去ろうともせず眺めくらしたということであった。

後事を周山の父君、ならびに鳥居塚の万屋に托して、天心は帰京したが、その時、彼はわれわれ家人にたいして、「候補地は二つある。一つは白砂青松の海岸で、多奇はないかわりに、いつまでも眺めあきないであろう。もう一つは岩礁錯雑した海岸で、見るからに奇勝の地であって、ここには住むべき家もついている。お前たちはどちらがいいと思うね」と言っていた。前者は草野のことで、後者は五浦なのだ。元子も、こま子も私も、異口同音に後者に賛意を表したので、天心はますますその買取方を督促するのであった。しかし、なんぼ性急な彼の申し出でも、五浦の購入は一朝一夕のことにはいかなかった。地元有志の尽力で、まず観浦楼の買取りが成功した。そして翌々月の七月には、オリー・ブルにともなわれて来朝していたミス・エンマ・サースビーという米人歌手姉妹が、天心に誘われて避暑旅行にここにやってきた。天心の手に入れた観浦楼の建物は、よほど乱暴に住み古してあって、二階のごときは天井が低く、しかもかなり煤けていた。階下の後部に臨時に湯殿を建て増して、辛くも住まったが、風呂場に用ゆる水だけは、黄門井の清澄な水を汲ませていた。そのころの五浦は、住民も少く、現在のように、都人士の別荘や旅館のようなものは一軒もなかった。

土地を求めて五浦の地に辿りつくまでの経路は、周山談では、上野駅→平駅→草野→綴駅→五浦となって居り、『父岡倉天心』では、磯原→草野→大津（八勝園宿泊）→五浦になっている。五浦に案内した者も、周山談では周山自身になっているが、『父岡倉天心』では、周山の友人である鳥居塚青年となっている。五浦の地をはじめて踏んだ時の天心の、

五浦に対する打ちこみ様は、表現の違いこそあれ、両者に共通している。土地入手の具体的手続は、「父に話をして、父の名義で第一にその土地を買い求め」（周山談）、「周山の父君、ならびに鳥居塚の万屋に托して」（『父岡倉天心』）と、少しの違いはあるものの、周山の父が重要な役割を果たしたことは両者共にはっきりしている。

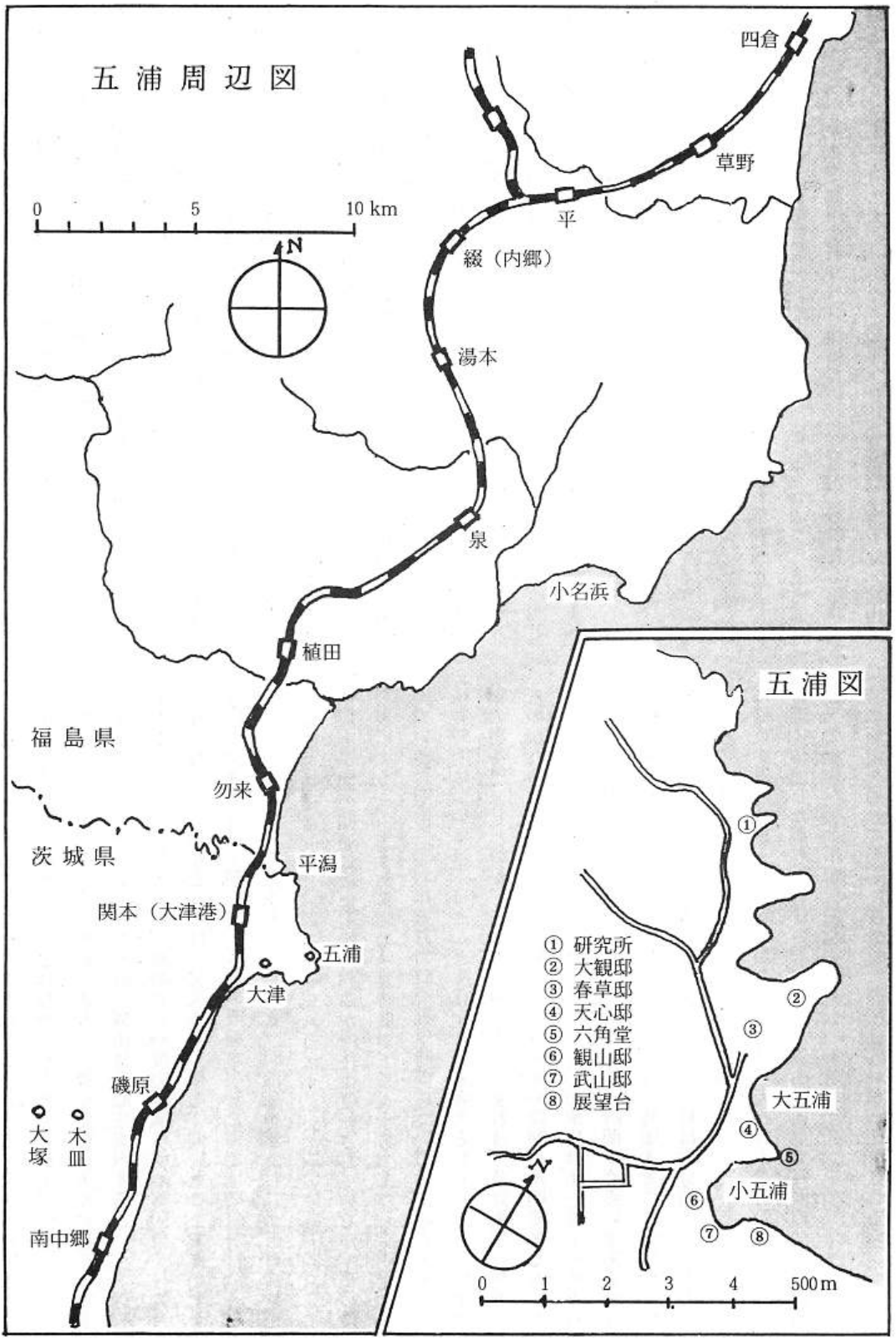
『父岡倉天心』のあとがきによれば、岡倉一雄は『父天心』を著すにあたり、大部分をその正確な記憶力に頼ったという。周山談との食いちがいは、その辺に原因があるのではないかと思われる。周山も一雄も四十年前の記憶をもとにして居り、どちらが事実に即しているかを証明する手段はないが、筆者は、次のように考えている。

天心が五浦に辿りつくまでの道順は、周山談の方が事実に近いであろう。周山談では、平方面に向かった理由が、土地を斡旋する人がいるということで、極めて明快であるし、草野から五浦へ廻った動機も、周山の提案ということがはっきりしている。コースも、上野から草野まで北上し、折り返して五浦まで南下していることは、ごく自然である。但し綴の駅から歩いたというのは、周山の記憶違いで、勿来駅が正しいと思われる。（註5）綴から五浦までは約二十七、八キロあり、勿来からならば六キロ程度の距離だからである。

これに対して『父岡倉天心』では、磯原からスタートしているが、その理由がはっきりしない。釣をしながら土地を物色するというのも、天心の性急さには似合わない。コースを見ると、磯原から草野へ北上し、次には大津まで南下して、また五浦へ北上し、途中の五浦を二度も通り越している。汽車を利用すれば、五浦は望めないので、海の見える磯原と草野に眼が行くかも知れないが。磯原は周山の故郷であるが、周山の介在なしでは、天心と結びつくことはなかったろう。鳥居塚青年もまた周山の仲介なしで接触することはなかったと考えられる。

周山の記憶は自分の直接体験であり、一雄の記憶は天心の話によるもので、その点も違いがあるだろう。周山は天心を案内するという予想もしなかった大役を与えられ、そのただ一度の経験は強烈な印象を与えたに違いない。一雄にとっては、父天心から親しく聞いたことであっても、幾度か関連する話を聞いて、多少の混線を生じたのではないか。

この当時の交通事情を考えて見ると、明治三十年二月二十五日に水戸―平間の鉄道が開通し、同三十一年八月に平―岩沼間が開通している。水戸―平間の開通式には、臨時列車が一往復運転されているが、その時刻表によると、平―勿来間の所要時間が下り五十分、上り五十四分となっている。明治三十六年五月当時の列車時刻については未調査であるが、所要時間については、ほとんど変化がないと考えられる。天心と周山が平の宿を出発したのが、午前八時前後と仮定すれば、草野海岸に到着するのが九時過ぎになる。草野駅発の上り列車の時刻が不明であるが、十時から十二時の間に乗車できたと考えれば、勿来には十一時―一時ぐらいに到着。勿来から五浦までゆっくり歩いて一時間半ぐらいであるから、途中で食事をしたとしても二時間。五浦には三時頃までにはついた可能性がある。そこで一～二時間の時間を費すと、日は大分傾く。関本駅（現在の大津港駅）から上野までは約六時間かかるので、その日のうちに帰京するのは難しい。もしかしてこの時、天心は大津町西町にある八勝園に宿泊したかも知れない。（註6）周山は徒歩で磯原の父の家に向かったであろう。万屋の鳥居塚青年は大津町に居住していたから、この時に周山を通じて天心に接触したのではないかと想像される。


五浦周辺図
0
5
10 km
N
四倉
草野
平
綴（内郷）
湯本
泉
小名浜
植田
福島県
勿来
茨城県
平潟
関本（大津港）
五浦
大津
磯原
大塚
木皿
南中郷
五浦図
① 研究所
② 大観邸
③ 春草邸
④ 天心邸
⑤ 六角堂
⑥ 観山邸
⑦ 武山邸
⑧ 展望台
大五浦
小五浦
0
1
2
3
4
500m

## (二) 土地の購入

五浦を一目で気に入った天心は、早速購入を決意した。（周山談）

『父岡倉天心』では、帰京後、家族に対して、草野と五浦のいずれを選択すべきかを相談したことになっているが、実はこの時には、天心の考えは決まっていたのであり、たとえ家族が草野を推すことがあったとしても、天心は説得して五浦に賛成させたのではないかと思われる。一雄の文では、「後事を周山の父君、ならびに鳥居塚の万屋に托して」帰郷している。この二人は、その後五浦の土地購入に尽力するのであり、いずれとも決めかねている時点において、二人に土地の購入を依頼することはなかったであろう。

「官地か民地か、又民地にしても誰の所有か分りもしません」という周山の言葉は正しく、五浦の地は僅かの民有地を取り囲んで、官有林の広がる原野であり、柴田稲作（後述）の建てた観浦楼も、しばらく無住で荒れ果てた状態であった。

「五浦の購入は一朝一夕のことにはいかなかった。」という一雄の文では、単なる時間的遅延であるのか、他に問題があったのか不明であるが、これを土地登記簿から推定すると次のようになる。

天心が最初に眼をつけた観浦楼とその土地は、当時柴田すゑ（柴田稲作の娘）が所有していた。それを飛田正（周山の父）の名義で、明治三十六年七月十四日に登記（売買証書日付は七月七日）して居り、僅か半月後の八月一日付で、岡倉覚三名義に変更（売買証書日付は七月十七日）している。この事実から見ると、土地所有者の柴田すゑは、天心に直接売却することを承知しなかったと考えられる。日本的に有名な天心であっても、茨城の最北端の田舎までは、その盛名が届いていなかったであろうし、よそ者には土地を売らないという気風があったのかも知れない。とも角一旦は、周山の父の名で買い取り、その後に天心名義にするという手数をかけねばならなかったのであった。

土地の入手には、飛田周山の父が相当に尽力したであろうことは推察できるが、客観的情勢もまた天心に幸いしたと言える。この土地は当時すゑの物であったが、すゑは経済的に困窮していたらしく、明治三十二年十月二十八日に、この土地を抵当にして、福島県石城郡平町（現在のいわき市平）の平銀行から百八十円という大金を借りていた。三十三年四月二十日の返済期限は過ぎていたが、完済には至らず、抵当権を設定されたままになっていた。天心から出た金によって平銀行からの借金を返済したものと思われ、抵当権抹消の日付は、明治三十六年七月十四日（飛田正名義の登記と同日）となっている。

この時の天心が入手した土地は、五浦七二七番の二（畑五畝八歩）とそれに隣接した土地（地番、面積共不明）である。その後明治三十八年五月四日付で二筆を加えている。大正十一年十月十六日に合併して七二七番の二とした時（天心死後岡倉一雄相続の直前）には、畑一反九畝二十三歩と表記されて居り、同年十一月三日には地目変更され、宅地五百九十三坪となっている。従って当初入手した土地は、観浦楼を含んだ一反歩程度の面積ではないかと推定される。（現在の五浦美術文化研究所敷地内）

一方では、鳥居塚青年の父庄吉の尽力で、現在の研究所の西側、道を隔てた土地の買収が行なわれた。元の所有者は大山玉吉であり、明治三十六年七月九日付で鳥居塚庄吉名義とし、続いて八月一日付で岡倉覚三の名で登記している。この場合にも、この土地は借金の抵当として、多

賀郡中郷村石岡鈴木某のため、抵当権設定がなされて居り、七月九日（鳥居塚庄吉名義登記と同日）付で、抵当権抹消がなされている。土地は五浦七三三畑一反六畝一九歩（明治四十年七月二日および大正十一年十一月三日に分筆し、現在は七三三ノ一～三の三筆になっている。）である。

飛田、鳥居塚の両者が介在して入手した土地は、前述の通りであるが、このほか、鈴木常三郎が、天心のために買い求めた土地がある。五浦七三〇（畑二畝二一歩）と、同七三一（畑二八歩）がそれである。同地の持主野崎源蔵は、鳥居塚浅次郎から半年の約束で百円を借り、同地を抵当に入れていたものである。その為鈴木常三郎に買戻特約付で譲渡したが、特約解除の登記をしたその日に、岡倉覚三名義に変更している。

また、五浦七三二（現在は一および二に分割）の土地は、第三者の登記を入れることなく、元所有者の鉄庄平から、天心が取得しているが、この土地も、抵当権抹消の日付と、岡倉覚三名による登記が同日であり、天心から出た金で、鉄庄平が借金の支払をしたであろうことが、読みとれるのである。

観浦楼買取を手始めに、天心は次々と土地を求め、その面積は厖大なものとなった。判明している部分（約一〇、五〇〇坪）については後段に表を掲げるが、不明の部分でなお天心の購入した土地があるかも知れない。北茨城市磯原にある法務局北茨城出張所で確認した所によると、合筆等により不要となった地番の登記簿は、二十年の保存期間を過ぎれば破棄するとの事であり、そのような形で登記簿上から消えてしまった土地番号があると思われる。従って登記簿の上だけでなく、綿密な現地調査をしないと、最終確認は不可能であろう。

茨城大学で管理している土地は、五浦七二七番ノ二（宅地九五一坪、三一四三・八〇㎡）であるが、これは昭和三十七年九月二十日に、元の七二七番ノ二と、七二八ノ一、七二七ノ三、七二七ノ四を合筆したものである。（註7）

天心は隣接地を買い求めると共に、南側の小五浦に面した土地を買約したものと思われる。明治三十九年に観山と武山が移り住んだ土地である。登記簿では観山（下村晴三郎）、武山（木村信太郎）が、土地所有者から直接買った形になっているが、明治三十九年八月二日付で登記している土地は、岡倉天心が購入して未登記のままにしてあったものを、二人が譲り受けたものと考えられる。この根拠は、明治三十九年六月十三日付黒沢吉次郎宛の手紙（註8）である。

拝啓　益御清適奉賀候　陳レハ横山大観　菱田春草　下村観山　木村武山の諸画伯今般五浦小生所有地面内ニ別荘建築致度由にて来十五日御地ニ参られ候ニ付清助翁ニ十分案内致候様申置候　且地面決定の上ハ擔任大工の儀適当の者可有之候や　平潟の小倉源蔵ハ此程失敗云云ニモ相聞へ候　実際如何可有之候や　諸先生来浦の節宜敷御差示被下度候

毎々御面倒相願恐縮ニ候へ共今般の儀ハ五浦開拓の一助とモ相成ニ付何卒御助力被下度　現在宅地外小生地面ハ何レニても諸氏の使用ニ任し候儀ニ御座候

忽々頓首

六月十三日

黒沢吉次郎様

大観、春草の居宅を建てた土地も、右の手紙によって、天心の所有地内であったと考えられる。この土地は、現在五浦観光ホテルの所有地となっているところであり、ここはもと官有林（農商務省管轄）だったところである。明治三十八年九月二十六日付黒沢吉次郎宛の手紙で、天心は次のように述べている。

不在中願置候事々

一　兼而御承知之別宅附近の官林御払下の場合ニは凡参百円ヲ限り御求メ置被下度候事

但し金員ハ東京下谷区谷中初音町四丁目日本美術院高瀬典曠氏ニ申置候間同氏より御受取被下度事

一　諸税其他臨時経費も同様高瀬ヨリ御受取御支弁被下度事

一　矢部清助月手当金五円四ケ月分御預申上候ニ付毎月御支払相願候事

右乍恐縮御依頼申候也

卅八年九月廿六日　五浦生

黒沢様

小二郎への貸金返り候ハヽ御預置被下度候　諸費用御支弁被下度

文末の署名五浦生は天心の別号、小二郎は鳥居塚小次郎である。この官有林払下は、即時に登記が行なわれず、天心死後の大正九年に至って初めて登記がなされ、私有地となったものである。

日本美術院研究所が建てられた土地も、同様に官有林の払下地であり、大正九年に至って登記（天心の長男一雄名義で）を済ませている。この土地は現在天心遺族と、財団法人観光資源保護財団（日本ナショナルトラスト）の協力により公園として整備され、昭和五十五年十一月八日に、「天心遺跡記念公園」の名で開園された。

## 岡倉天心購入土地一覧表（登記簿による）

### ① 天心邸内（現茨城大学五浦美術文化研究所敷地）

| 所在地及び地番 | 地目 面積 | 登記順位 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 五浦七二七ー二 | 畑五畝八歩（宅地九五一坪）※ | 明・31・4・28 柴田すゑ（譲与） | 明・36・7・14 飛田　正（売買） | 明・36・8・1 岡倉覚三（売買） | 明・36・8・1 岡倉覚三（売買） 合筆部分 | 明・38・5・4 岡倉覚三（売買） 合筆部分 | 明・38・5・4 岡倉覚三（売買） 合筆部分 | 大・11・11・3 岡倉一雄（相続） | 大・11・11・3 岡倉もと（売買） | 大・14・3・11 米山こま（相続） |

| | 10 | 11 |
|---|---|---|
| | 昭・17・11・11 岡倉天心偉績顕彰会（贈与） | 昭・30・7・18 文部省（寄附） |

※　七二八ー一、七二七ー三、七二七ー四を合筆した面積

註　1　地目・面積は当初のものを記載し、（　）の中に変更後のものを記載した。面積がメートル法に書き換えられている場場合でも、面積に変更がなければ、そのまま尺貫法で示している。

2　氏名の下の（　）内に登記原因を示した。

3　登記順位最後尾の氏名が、現在の所有者である。

## ② 天心邸隣接地

| 所在地及び地番 | 地目 面積 | 登記順位 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 五浦七二七－六 | 宅地 八五坪 | 明・36・11・1 岡倉覚三（売買） | 大・11・11・3 岡倉一雄（相続） | 大・11・11・3 岡倉もと（売買） | 大・14・3・11 米山こま（相続） | | | | | |
| 五浦 七三〇 | 畑 二畝二一歩 | 明・24・5・16 野崎源蔵 | 明・39・5・17 鈴木常三郎（売買） | 明・39・10・19 岡倉覚三（売買） | 大・11・11・3 岡倉一雄（相続） | 大・11・11・3 岡倉もと（売買） | 大・14・3・11 米山こま（相続） | 昭・31・5・26 岡倉古志郎ほか五名（相続） | | |
| 五浦 七三一 | 畑 二八歩 | 明・24・5・16 野崎源蔵 | 明・39・5・17 鈴木常三郎（売買） | 明・39・10・19 岡倉覚三（売買） | 大・11・11・3 岡倉一雄（相続） | 大・11・11・3 岡倉もと（売買） | 大・14・3・11 米山こま（相続） | 昭・31・5・26 岡倉古志郎ほか五名（相続） | | |
| 五浦七三二－一 | 畑 六畝一歩〔六畝二五歩〕 | 明・35・2・6 鉄庄平 | 明・38・6・10 岡倉覚三（売買） | 大・11・11・3 岡倉一雄（相続） | 大・11・11・3 岡倉もと（売買） | 大・14・3・11 米山こま（相続） | 昭・31・5・26 岡倉古志郎ほか五名（相続） | | | |
| 五浦七三二－二 | 畑 一畝歩〔道路〕 | 明・38・6・10 岡倉覚三（売買） | 明・41・7・2 大津町（売買） | 昭・35・10・18 北茨城市 | | | | | | |
| 五浦七三三－一 | 畑 六畝一五歩〔宅地 二八一坪〕 | 明・26・11・15 大山玉吉（相続） | 明・36・7・9 鳥居塚庄吉（売買） | 明・36・8・1 岡倉覚三（売買） | 大・11・11・3 岡倉一雄（相続） | 大・11・11・3 岡倉もと（売買） | 大・14・3・11 米山こま（相続） | 昭・31・5・26 岡倉古志郎ほか五名（相続） | | |
| 五浦七三三－二 | 畑 一五歩〔道路 四九㎡〕 | 明・36・8・1 岡倉覚三（売買） | 明・41・7・2 大津町（売買） | 昭・35・10・18 北茨城市 | | | | | | |
| 五浦七三三－三 | 畑 六畝二三歩 | 明・36・8・1 岡倉覚三（売買） | 大・11・11・3 岡倉一雄（相続） | 大・11・11・3 岡倉もと（売買） | 大・14・3・11 米山こま（相続） | | | | | |
| 五浦七一八－八 | 原野三反一畝二七歩〔畑〕 | 大・9・2・19 農商務省 | 大・9・2・19 岡倉一雄（売買） | 大・11・11・3 岡倉もと（売買） | 大・14・3・11 米山こま（相続） | 昭・31・5・26 岡倉古志郎ほか五名（相続） | | | | |
| 五浦七一八－一〇 | 原野 二畝六歩 | 大・9・2・19 農商務省 | 大・9・2・19 岡倉一雄（売買） | 大・11・11・3 岡倉もと（売買） | 大・14・3・11 米山こま（相続） | 昭・31・5・26 岡倉古志郎ほか五名（相続） | | | | |

七三二番を分筆

七三三番を分筆

| 所在地及び地番 | 五浦六八一 | 五浦六八二 | 五浦六八五 | 五浦六九〇―一 | 五浦六九二―一 | 五浦七一八―一一 | 五浦七一八―一四 | 五浦七一八―一八 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 地目 面積 / 登記順位 | 畑 二畝二歩 (宅地六三・七二坪) | 畑 四畝一二歩 (宅地三〇一坪) | 畑 五畝九歩 (宅地一五六・五坪) | 畑 一畝二九歩※ (宅地一三九・三三㎡) | 畑 三畝四歩※ (一二五六㎡) | 原野六畝一七歩 (宅地一九七坪) | 原野一反一畝九歩 (畑一一二〇㎡) | 原野一反四畝一二歩※ (九畝二二歩) |
| 1 | 明・29・4・6 伊藤はな(相続) | 明・27・11・2 西村佐太郎(売買) | 明・29・4・6 伊藤はな(相続) | 明・25・4・12 鈴木太平(売買) | 明・25・4・12 鈴木太平(売買) | 昭・4・1・31 農林省 | 大・9・2・2 農商務省 | 大・9・2・2 農商務省 |
| 2 | 明・39・7・25 伊藤安次郎(相続) | 明・33・3・9 鈴木三郎治(売買) | 明・39・7・25 伊藤安次郎(相続) | 明・40・9・4 村山健次郎(売買) | 明・40・9・4 村山健次郎(売買) | 昭・4・1・31 渡辺千代次 村田彌一郎(売買) | 大・9・2・2 木村信太郎(売買) | 大・9・2・2 木村信太郎(売買) |
| 3 | 明・39・11・17 木村信太郎(売買) | 明・36・9・15 穂積泰三(売買) | 明・39・8・2 木村信太郎(売買) | 明・41・4・23 下村晴三郎(売買) | 明・41・4・23 下村晴三郎(売買) | 昭・4・8・15 下村晴三郎(売買) | 大・9・10・26 山崎多免(売買) | 大・9・10・26 山崎多免(売買) |
| 4 | 大・5・5・5 山崎多免(売買) | 明・37・9・27 山本喜八(売買) | 大・5・5・5 山崎多免(売買) | 昭・11・1・10 下村時春(相続) | 昭・11・1・10 下村時春(相続) | 昭・11・1・10 下村時春(相続) | 昭・10・6・26 山崎恵造(売買) | 昭・10・6・26 山崎恵造(売買) |
| 5 | 昭・10・6・26 山崎恵造(売買) | 明・39・8・2 下村晴三郎(売買) | 昭・10・6・26 山崎恵造(売買) | 昭・11・1・10 伊藤勝雄(売買) | 昭・11・1・10 伊藤勝雄(売買) | 昭・11・1・10 村田彌一郎(売買) | | |
| 6 | | 昭・11・1・10 下村時春(相続) | | 略 | 略 | 昭・59・6・21 五浦観光ホテル(代物弁済) | | ※分割した土地を含む面積 |
| 7 | | 昭・11・1・10 村田彌一郎(売買) | | 略 | 略 | | | |
| 8 | | 略 | | 昭・58・11・11 鈴木静江(相続) | 昭・58・11・11 鈴木静江(相続) | | | |
| 9 | | 昭・59・6・21 株式会社五浦観光ホテル(代物弁済) | | ※分筆した六九〇―二を含む面積 | ※分筆した六九二―二を含む面積 | | | |

## ④ 大観・春草邸附近

| 所在地及び地番 | 地目<br>面積 | 登記順位 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 註 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 島廻一八〇九―一五 | 原野四畝一五歩※<br>（宅地二〇四・九五坪） | 大・9・11・8<br>農商務省 | 大・9・11・8<br>星野太一郎（売買） | 大・10・5・14<br>米山高麗（売買） | 昭・3・5・26<br>岡倉古志郎ほか五名（売買） | 昭・32・4・10<br>伊藤忠蔵（売買） | 昭・39・7・8<br>伊藤始（贈与） | 昭・46・9・7<br>伊藤義雄（贈与） | 昭・46・10・25<br>酒井昭治（売買） | ※は分筆した一八〇九―三一を含む面積 |
| 島廻一八〇九―一六 | 原野一反四畝六歩※<br>（畑六畝五歩） | 大・9・2・19<br>農商務省 | 大・9・2・19<br>岡倉一雄（売買） | 大・11・11・3<br>岡倉もと（売買） | 大・14・3・11<br>米山とま（相続） | 昭・31・5・26<br>岡倉古志郎ほか五名（相続） | | | | ※は一八〇九―三二を含む面積 |
| 島廻一八〇九―二九 | 畑八畝一歩<br>（山林） | 昭・31・5・26<br>岡倉古志郎ほか五名（相続） | 昭・33・5・13<br>村越通（売買） | 昭・48・9・28<br>株式会社港北商事（売買） | 昭・52・2・25<br>東宝土地建物株式会社（売買） | 昭・52・8・25<br>金幸商事株式会社（売買） | | | | |
| 島廻一八〇九―三二 | 畑・二八九㎡<br>（原野） | 昭・31・5・26<br>岡倉古志郎ほか五名（相続） | 昭・42・9・5<br>桐原妙持分全部<br>酒井昭治（売買） | 昭・42・10・9<br>岡本貞三持分全部<br>酒井昭治（売買） | 昭・42・11・22<br>岡倉獅郎持分全部<br>酒井昭治（売買） | 昭・42・12・1<br>岡倉古志郎持分全部<br>酒井昭治（売買） | 昭・43・1・12<br>岡本元持分全部<br>酒井昭治（売買） | 昭・43・2・12<br>岡倉淳子持分全部<br>酒井昭治（売買） | | 一八〇九―一六より分筆 |
| 島廻一八〇九―三三 | 原野一町七反二畝一二歩<br>（山林） | 大・9・2・2<br>農商務省 | 大・9・2・2<br>横山秀麿（売買） | 昭・34・4・2<br>横山静子（相続） | 昭・34・4・27<br>株式会社五浦館※（売買） | | | | | ※五浦館は、商号を五浦観光開発株式会社、さらに株式会社五浦観光ホテルと変え、登記しているが省略した |
| 島廻一八〇九―二四 | 宅地八〇九・八坪 | 大・9・1・23<br>横山秀麿（売買） | 昭・34・4・22<br>横山静子（相続） | 昭・34・4・27<br>五浦館（売買） | | | | | | |
| 島廻一八〇九―二五 | 宅地九九・七二坪 | 大・9・1・23<br>横山秀麿（売買） | 昭・34・4・22<br>横山静子（相続） | 昭・34・4・27<br>五浦館（売買） | | | | | | |
| 島廻一八〇九―二六 | 宅地六九・五四坪 | 大・9・9・24<br>横山秀麿（売買） | 昭・34・4・22<br>横山静子（相続） | 昭・34・4・27<br>五浦館（売買） | | | | | | |
| 島廻一八〇九―二七 | 山林九畝 | 大・9・4・5<br>横山秀麿（売買） | 昭・34・4・22<br>横山静子（相続） | 昭・34・4・27<br>五浦館（売買） | | | | | | |
| 島廻一八〇九―二八 | 山林一畝二八歩 | 大・9・4・5<br>横山秀麿（売買） | 昭・34・4・22<br>横山静子（相続） | 昭・34・4・27<br>五浦館（売買） | | | | | | |

| 所在地及び地番 | 椿 一八三八 | 椿一八三九―六 | 椿一八三九―二五 | 椿一八三九―一四 | 椿一八三九―二六 | 椿一八三九―一五 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 地目 面積 | 畑 一七歩 | 原野四畝一八歩※ (畑 三五四㎡) | 畑 一〇二㎡ | 原野 四畝九歩※ (畑 二三〇㎡) | 畑 一九六㎡ | 原野二反一畝一四歩 (山林) |
| 1 | 明・37・1・23 星野太エ門 | 大・9・2・19 農商務省 | 昭・31・5・26 岡倉古志郎ほか五名(相続) | 大・9・2・19 農商務省 | 昭・31・5・26 岡倉古志郎ほか五名(相続) | 大・9・2・19 農商務省 |
| 2 | 明・37・1・23 岡倉覚三(売買) | 大・9・2・19 岡倉一雄(相続) | 昭・42・9・11 桐原妙持分全部 酒井昭治(売買) | 大・9・2・19 岡倉一雄(売買) | 昭・42・9・11 桐原妙持分全部 酒井昭治(売買) | 大・9・2・19 岡倉一雄(売買) |
| 3 | 大・11・11・3 岡倉一雄(相続) | 大・11・11・3 岡倉もと(売買) | 昭・42・10・9 岡本貞三持分全部 酒井昭治(売買) | 大・11・11・3 岡倉もと(売買) | 昭・42・11・9 岡本貞三持分全部 酒井昭治(売買) | 大・11・11・3 岡倉もと(売買) |
| 4 | 大・11・11・3 岡倉もと(売買) | 大・14・3・11 米山こま(相続) | 昭・42・11・22 岡倉獅郎持分全部 酒井昭治(売買) | 大・14・3・11 米山こま(相続) | 昭・42・11・22 岡倉獅郎持分全部 酒井昭治(売買) | 昭・31・5・26 岡倉古志郎ほか五名(相続) |
| 5 | 大・14・3・11 米山こま(相続) | 昭・31・5・26 岡倉古志郎ほか五名(相続) | 昭・42・12・1 岡倉古志郎持分全部 酒井昭治(売買) | 昭・31・5・26 岡倉古志郎ほか五名(相続) | 昭・42・12・1 岡倉古志郎持分全部 酒井昭治(売買) | |
| 6 | 昭・31・5・26 岡倉古志郎ほか五名(相続) | | 昭・43・2・10 岡倉元持分全部 酒井昭治(売買) | | 昭・43・2・10 岡倉元持分全部 酒井昭治(売買) | |
| 7 | | | 昭・43・2・10 岡倉淳子持分全部 酒井昭治(売買) | | 昭・43・2・10 岡倉淳子持分全部 酒井昭治(売買) | |
| 8 | | | | | | |
| 註 | | ※一八三九―二五を含む面積 | 一八三九―六より分筆(昭・41・4・21) | ※一八三九―二六を含む面積 | 一八三九―一四より分筆(昭・41・4・21) | |

## (三) 柴田稲作をめぐって

ここで、観浦楼とその土地の旧所有者柴田稲作について触れたい。茨城大学五浦美術文化研究所前の道路に面して、一枚の石碑が立っている。

(次頁写真) この碑は、柴田稲作の死の一年半後に建てられたもので、『柴田稲作紀念碑』の篆額は従三位勲三等安田定則、撰文は正七位高畠千畝、野口勝一書となっている。その大要を意訳して次に掲げる。

柴田稲作翁は常陸国多賀郡木皿村の人で、勧業の志が篤く、中山家に建言して養蚕業や海産業を起こさせた。多賀の海の鮑業はこれによって始まった。漆を植え、温州みかんの栽培も翁の力によるものである。大津町に移り、魚貝の缶詰、塩づけ、乾物、ねり物、骨粉、海藻の乾製等を教え、有益であった。また大津の東半里のところにある五浦湾を、開拓する者が誰もいないのを惜しみ、そこの気象条件や潮の様子を十一年間研究し、明治十四年に政府の許可を得、翌年工事を起こした。海岸を削り道を通し、害になる岩礁を除き、十七年に至って漁船を繋留できるようになった。翁が五浦湾上に家を造って住むと、それに続いて若干の漁民が移り住んだ。明治二十年に東京で大日本水産会の共進会が開かれ、翁は受賞したが、この時会頭の大勲位能久親王殿下から、その篤志を嘉して書籍を賜った。翁は感激して「一介の漁夫が皇族を眼前に拝して、こんな晴れがましいことがあろうか。」と人に語り、ますます努力をするのであった。不幸にも病にかかって明治二十一年六月五日に没した。生まれは文政元年庚辰二月二十五日であり、享年六十九才であった。翁は幼い時から絵を描くことが好きで、立原杏所、椿椿山に学び、華園または楊舟と号した。暇をみつけては絵を描き、年をとっても怠らなかった。翁はこのように事業においても趣味の面でも良く学び良く楽しむ人であった。同郡の人々が翁の功績を思い、翁を讃える碑を建てて不朽のものにしたいと考えた。私は翁を古くから良く識っているので撰文を請われたが、翁の志を感じているし、人々の建碑の動きを嬉しく思うので、固辞することもできず、あらましを記して後世に残すものである。

柴田稲作紀念碑　明治二十二年建立

模写『百花之図』　稲田稲作画　明治二十一年

野口勝一は嘉永元年（一八四八）磯原の生まれで、維新後教員をし、その後新聞界に入り、茨城新聞社を起こしたが、後政界に転じて県会議長、衆議院議員連続三期当選を果たした人物である。この碑も書写のみでなく、撰文にも大きく関係したかも知れない。碑文は簡潔な文体で、柴田稲作の事績を活写しているが、一部に誤りがある。稲作の死去を明治二十一年六月五日としているが、これは二十一年六月四日が正しいと思われ（註9）、生れを文政元年庚辰二月二十五日としているのは、文政三年が正しい。文政元年は戊寅の年であり、また文政元年を正しいとすると明治二十一年没では、享年七十一才（数え年）となってしまう。

稲作が観浦楼を建てたのは、碑によると明治十七年頃であり、『父天心』によると明治十五年のころと、若干の差がある。それ以前には大津町に住んでいたから、五浦湾の工事が終る前に五浦へ引越す理由はなかったと思われ、碑にいうところが正しいであろう。

稲作は五浦で鮑を採取しては乾鮑を作り、また鮑料理を客に供していた。『父天心』の記述で、観浦楼の二階の天井が低く、かなり煤けていたというのは、二階が居住用でなく、乾鮑の製造に使用されたのではないかと思われる。彼は晩年、娘のすゑに婿を取り、娘夫婦に観浦楼の仕事を任せたが、事情が変って鮑業が不振となり、それが原因となって、すゑは一子守（明治二十年九月十五日生　昭和三十年十一月六日没）まで設けた茂太郎と離婚したのである。その後すゑは大津町の某家へ嫁いで二人の子を生んだがいずれも死去し、再び婚家を去った。五浦の土地は、稲作の長男汎の子勝雄の所有となっていたものを、明治三十一年、すゑに譲与という形で所有権が移っている。稲作の晩年をすゑが面倒見たことがその理由であったようである。（註10）　婚家を離れ、父稲作も兄の汎（明治二十五年三月八日死去）もいなくなったすゑにとって、五浦の土地は、かけがえのない財産であったかも知れない。

柴田家の鮑業が不振になった原因について、すゑの孫柴田実氏は、大津町に鮑の採取組合ができて自由に採れなくなったからと、言って居られた。

『図説北茨城市史』によると、大津町の採鮑は、最盛期の昭和十一年には七五〇〇貫の水揚があったという。採鮑の技術は早くから開拓され、明治十二年には潜水器が使用され、同十七年には水眼鏡が導入されて、乱獲気味となったので、県当局が介入して潜水器使用の期間に制限を設け、二十三年には潜水器使用を全面禁止した。多賀郡役所の調停により採鮑業者の入会について合意が成立し、二十五年には潜水器採鮑の大津町平潟町採鮑業組合が設立された。（註11）　柴田すゑは、この新しい漁業界の動きに乗れなかったのではなかろうか。

再び稲作に戻ろう。碑にもあるように、稲作は絵にも才能をあらわし華園、楊舟と号した。華園の号は、稲作が師事した椿椿山の師渡辺華山を意識したものであろうし、楊舟はもしかして雪舟等楊から名付けたかも知れない。碑では立原杏所と椿椿山に学んだことになっているが、杏所に直接学ぶ機会があったかどうかは不明である。画風は椿山風の花鳥画を残している。稲作の曽孫柴田兵部氏は、稲作の絵を所蔵しているがその絵は椿山の『百花之図』を模写して、知人の樫村氏に贈ったもので、明治二十一年の早春に描いた旨の詞書がある。（三十八ページ写真参照）すゑの孫柴田実氏も稲作の絵を二点所蔵しているとの由であるが、実見の機会を得ていない。

稲作は多賀郡川尻村金城辰右衛門の四男として生まれ、北中郷村木皿

三番屋敷の柴田治部衛門の養子となった（註12）人物であるが、実業の面でも趣味の面でも、才能を発揮した。人望も篤かったようで、明治六年区長戸長制度ができた時、民意をくみ上げる機関として置かれた集議所の、会員として挙げられている。北茨城市に属する地域で二人だけが選ばれているところを見れば、相当な人物と見て良いだろう。第一回の会議の折、稲作は、大津村の河川改修によって耕作地を造成し、その収益金から学校建設の基金を捻出する議案を提出している（註13）という。

五浦に着目したのも、柴田稲作の企画力・実行力のあらわれと見て良いだろう。

## 第二章　五浦の建築

### ㈠　天心邸

古い家屋のついた土地を入手した天心は、早速基子夫人を同道して五浦へ移り、八月半ばにはサースビ姉妹（註14）を招いている。この頃の状態は、買い取った観浦楼の後部に風呂場を建て増しただけの状態と思われ、大改修は明治三十八年に行われた。本研究所蔵の六角堂棟札（本号目次）には明治三十八年六月とあり、『父岡倉天心』によると、八月には観浦楼の修復と六角堂建築が完成していた。天心の書簡から見ると、七月半ばには建築が完成していたか、完成予定であったようである。三十八年七月十七日付河合寅次宛書簡には次のようにある。

拝啓　酷暑の折柄益々御清適大賀至極に奉存候　偖て野生儀今般御地五浦に草堂を営み候に付今後種々御高庇に依り候ことと存候　就ては参堂の上一応御挨擦（ママ）可申上筈に候へ共不日帰京の都合に有之旁欠礼の次第ながら八勝園に於て疎（ママ）酒差上度候間　御多忙中恐縮の至に候へ共明十八日午后六時より同園に御光来被下度　此段貴意候

草々頓首

岡倉覚三

卅八年七月十七日

解題によれば、石版刷（代筆）で、五浦の有力者や関係者に配布されたものである。東京を引き払い五浦の住人となった天心が、居宅の完成を機に、地元有力者との懇親を図ったものであろう。

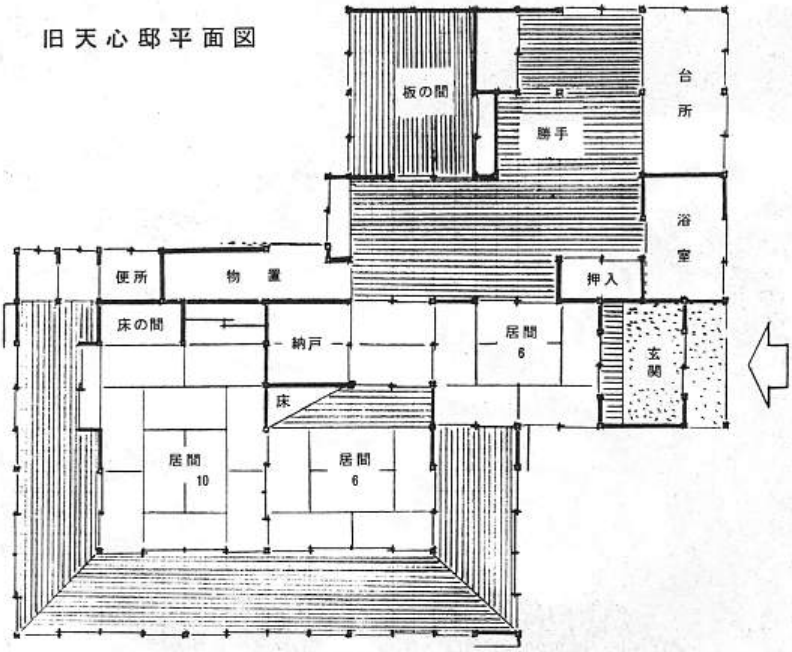
この時の改修・拡張がどの程度のものかは確定する資料がないが、観浦楼の二階部分を取りこわして平屋にすると共に、ある程度の改装をしたのではないかと考えられる。

『父岡倉天心』によると、四十年の四、五月頃から、更に敷地を拡張、母屋の増築をはじめたという。

天心は結霜を見ざる四月五月の候になると、新たに居邸の敷地を拡め、母屋の増築を試みることになった。この工事は、一私邸の建築としては相当大がかりのもので、さかんにダイナマイトを使用し、岩を削り土地を拡げていた。神経質の元子などは、連日の爆音に恐怖して、大津町の某邸へ避難するほどだったそうだ。二三カ月のあいだに、工事はすこぶる進捗して、母屋も離室も、湯殿も台所も、そして土蔵も、ことごとく落成をみた。

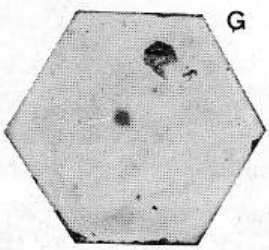
ダイナマイトを使用して岩を削ったというのは、母屋の東側に建てた離れの部分で、現在風呂場跡にそれが残っている。この土木工事を施行

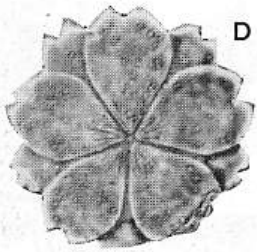
旧天心邸平面図

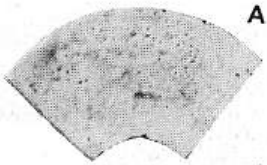


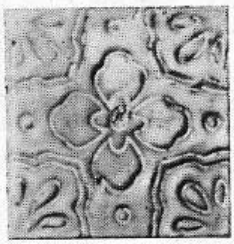
旧天心邸

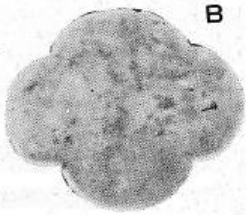
天心邸離室風呂場跡

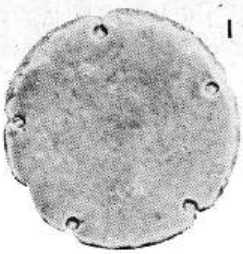


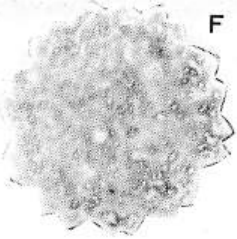



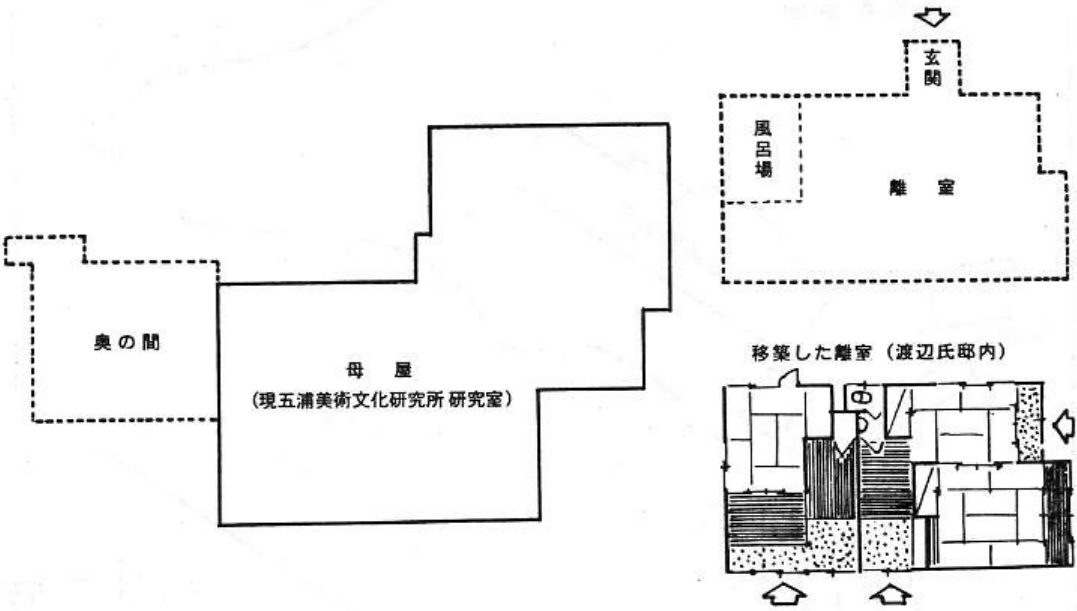


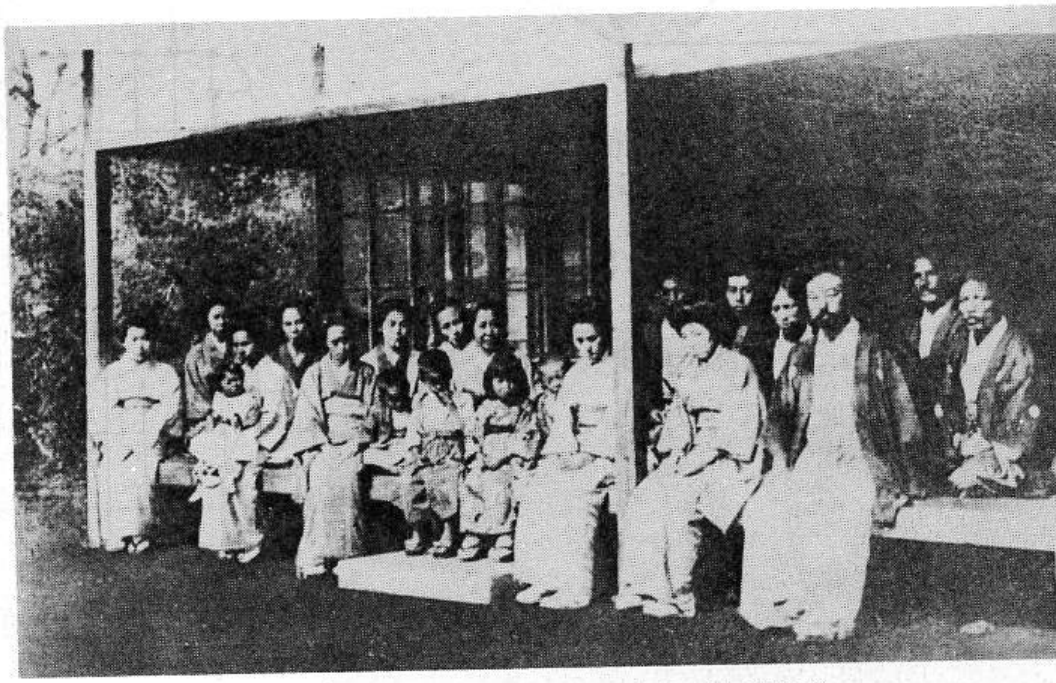



風呂場タイル

旧天心邸平面図



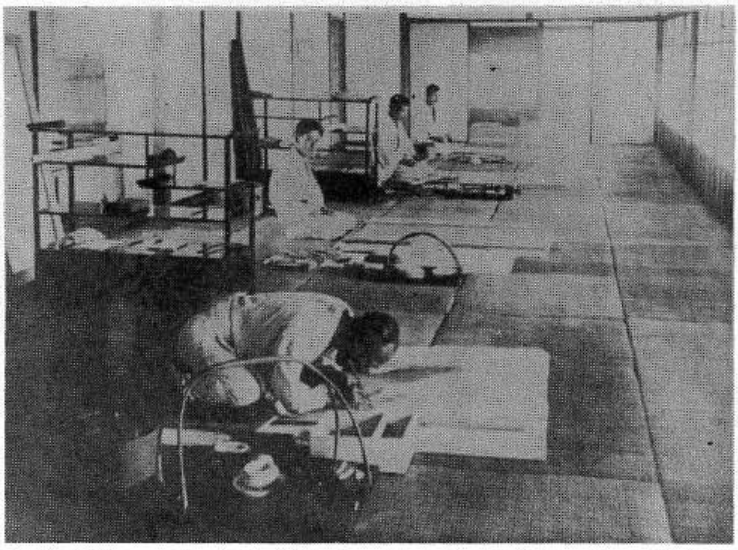
天心と四人の画家の家族（天心邸奥の間の前で）

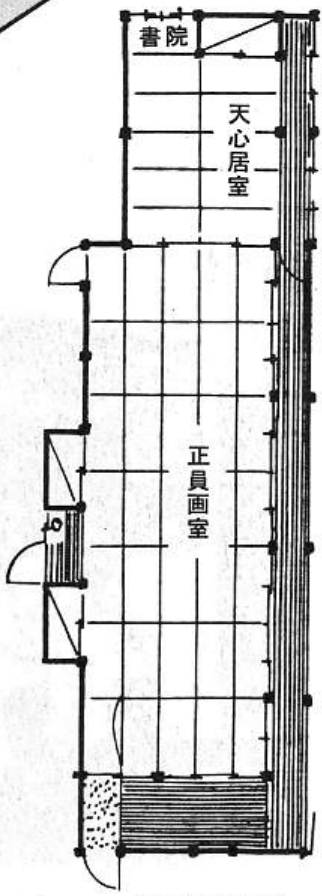
日本美術院研究所

建物配置図



日本美術院五浦時代の作画場面






正員研究室棟

したのは、大工小倉源蔵の知人で、平潟に住んでいた仕事師で名前は明治（姓は不明）である。（註15）

東側離れは、東西六間半、南北三間半であり、北側東寄りに一坪程の玄関がついていた。この建物は、天心の釣の船頭千代次が譲り受け、昭和七年頃渡辺邸内に移築した。一部の改造はあるものの、現在渡辺昇氏（千代次長男）が使用しているので、その平面図を掲げる。（43頁図）

この離れの西隅にあった風呂場の跡には、数多くのタイルが残っている。（42頁写真）　このタイルについては、ちょうど在京中の基子夫人に宛てた手紙で、発注手配を依頼している。

風呂敷瓦

一尺四方　　四十五枚

五寸四分（方の誤り）　十五枚

丸型扇面型等取交　　二十枚

色は白色　淡青　淡黄　淡緑　淡紅取交セ総而薄色可然候

右至急御送被下度

三月廿日　　五浦

もと殿

帰リ逼り候ハヽ永邦殿へ御依頼被下度　○不得止ハ板谷完山氏へ御尋被下度　序ニ状袋（通常のも）沢山御廻し被下度

この手紙は封筒がなく年代不明であるが、岡倉天心全集では四十三年のこととしている。筆者は、この手紙は四十年と考える。離れの建築にかかる直前で、タイルを準備するにふさわしい日時であるということのほかに、次の理由からも、そのように判断する。

四十三年三月廿日付下村観山宛書簡（これも全集では四十三年と推定）の中で、明朝出京して一か月滞在すると予告して居り、同年三月二十一日付中川忠順宛書簡（下谷区消印がある）で、東京に着いたばかりであると言っている。自分が上京して一か月滞在する予定であれば、帰浦を間近にした夫人に手紙を出すより、会って話をした方が時間的にも早いし、場合によっては、自分の眼でタイルを選ぶゆとりもある筈であり、四十三年説は可能性が薄い。

三月二十日に天心が五浦に居た可能性のある年は、四十年（三月二十一日に上京して三月三十日帰浦）、四十二年、四十三年、四十五年であるが、四十年三月十三日付高橋太華宛書簡の中で、「荆妻目下上京中」とあり、もっとも可能性が強い。

風呂場のタイルやセメントの状況から見ると、凹凸のある岩の上に南側に傾斜をつけて、セメントを塗り、タイルを貼っていて、建築と同時に施工したと思われる。

タイルの種類は、白色で方形のもの、長方形のもののほか、別掲の変り型で色釉のかかったものがある。手紙の指定と一致するものは、方形のものと扇面型だけであるが、色あいは、薄色がよいとする天心の意向にそい、地味な色になっている。方形のタイル以外は、配置もラフで、目見当で配置したと思われる。

風呂桶は風呂場の西寄りに、岩を長方形にくり抜きそこに据え、外部

## 風呂場跡タイル調

| 記号 | 形体 | 色 | 寸法（単位 cm） | 個数 |
|---|---|---|---|---|
| A | 扇面 | 淡緑・濁黄 | 長 17 | 6・3 |
| B | 木瓜（平） | 濁黄 | 13.5 × 16 | 2 |
| C | 瓢箪 | 淡緑・濁黄 | 20 × 9.5 | 6・2 |
| D | 八重桜 | 濁黄 | 径 15.7 | 3 |
| E | 方形（牡丹） | 淡緑・濁黄 | 13.7 × 14 | 3・2 |
| F | 八重桜（平） | 濁黄 | 径 16 | 1 |
| G | 六角 | 淡緑・濁黄 | 長 14 | 3・4 |
| H | 方形（花菱） | 淡緑 | 14 × 14 | 2 |
| I | 古代鏡 | 濁黄 | 径 14.5 | 2 ＋ ※1 |
| J | 方形 | 白 | 1 辺 15.5 | 92 |
| K | 短冊 | 白 | 15.5 × 7.7 | 24 |
| L | 方形 | 淡緑 | 14 × 14 | 3 |
| M | 方形 | 濁黄 | 16.2 × 16.2 | 1 |

① ※ 破損して一部欠失　　② 桜型のタイル跡２箇
③ 白タイルの中に灰色のものが混在しているが，元の色か変色か不明なので，白に分類した。

母屋側から焚くようになっていた。

母屋の西側に作られた奥の間は、『岡倉天心』（斉藤隆三著）187ページにある写真と、岡倉天心全集（平凡社）第三巻口絵に掲載されている写真（本号43頁）によって、ある程度復元推定の可能な部分がある。

写真に写っている範囲は、奥の間の南面と、ガラス戸を透して見た西面の一部である。これを図法的に復元して見ると、次のようになる。奥の間は、母屋の西側、南隅より二間のところから西に向かって突き出しその寸法は三間半であり、南側に半間、西側に一間の廊下が、鍵の手に廻り、吹放しで雨戸はついていない。座敷と廊下の境はガラス障子で仕切られている。廊下の奥手に便所が突出している。

渡辺千代次の長女渡辺やす氏（大正十年一月生）の記憶によると、奥の間の座敷は、母屋の廊下から直接入れるようになっていて、十～十二畳の細長い部屋で、北側に床の間と違い棚、西側には附書院があり、その欄間には、下村観山の描いた銀箔に杉の絵があったという。昭和五十五年に母屋の改修をした際、母屋の附書院の欄間から取り外した杉の絵が、それに相当する模様である。その記憶が正しいとすると、附書院自体も、奥の間解体の時（年月日不明）に、母屋へ移したものと考えられる。また奥座敷から、母屋の北側を通る廊下（現在の便所の位置か）に出られたという。

屋根は寄棟であり、母屋と同じく木端葺である。柱は母屋に較べて太い。（母屋は三寸五分角、奥の間は四寸角）。南側軒下白壁の中央部分は、柱を中央に狭んで巾一間、高さ一尺三寸程の連子窓風になっている。縁下は、母屋が犬返しをつけているのに対し、吹抜けである。また母屋

周囲が雨受けの玉砂利を敷いているのに較べ、土のままである（のきにはトタンと思われる雨どいがついている。）など、幾分かの違いがある。渡辺やす氏の記憶によると、ガラス障子は漆塗障子であったという。

一段高い西側に作られた土蔵は、東西四間、南北二間半の白壁土蔵造り瓦葺であった。雨漏による腐朽が甚しかったが、昭和五十七年の台風で遂に屋根が抜け落ちたので、五十八年五月に取り壊した。その時の調査によると、屋根瓦の葺きがえや、土台をコンクリート布基礎にするなど大巾な改修の跡が見られた。

## (二) 研究所

日本美術院は明治三十九年秋から、大正二年まで五浦にあった。その当時の建物がどのようなものであったか、それを知るための資料は極めて少ない。

『日本美術院史』の中では、次のように述べている。

研究所は全部畳敷きの純日本風の平屋建築で、海に面して三十五畳敷の広間が設けられ、そこに、大観と観山と、春草と武山との四正員が、一列に東に向かって座を構え、縑素を延べて製作に従事した。正員の画室である。これに隣りて、北の方に奥まりて十畳ほどの書院附きの一室が置かれて、それを天心の居室とした。またそれと反対に位置を取り、広間に隣りて南に一段低く三十畳ほどの室がつけられてあった。それを研究会員の製作室とした。これを母屋として、さらにこの外に美術学校以来一貫して、天心の往くところにしたがい、一切の雑務に励んでおった名取幸次郎という忠僕夫妻の居が隣接して建てられてあった。

『父岡倉天心』では、次のように述べている。

院の研究所は、菱田邸からはるかに田圃のあいだの細道を行くこと二丁あまり、椿の磯、中磯、蛇頭（びがしら）を隔てた端磯の上に建てられていた。それで四人の画伯は、昼間、自宅からここに通って作画に精進していた。研究所の留守居には、これも東京から移ってきた名取幸二郎夫妻が、構内猫額の畑に百合などを栽培しながらまめまめしく働いていた。

また工事の時期をうかがわせるものとして、次の記述がある。

大津町の鳥居塚家所蔵の天心の書簡によれば、同年十月十五日までに、四人の住居ならびに研究所の五棟を落成することが、工事にあたった金大工の契約の根幹になっているようである。

この手紙は、岡倉天心全集にも収録されていないので、詳細は不明であるが、四人の画伯の住居と、研究所の建物が、平行して建築されていたことを推測させるものである。

岡倉天心全集第七巻には次の天心書簡が掲載されている。

248　六月十三日　矢部清助・河合寅次あて　封書〔封筒なし〕

皆々無事の事と存候　陳レハ横山　下村　菱田　木村の諸先生方今般五浦ニ別荘建築相成度趣ニて来十五日ニ其地ニ参られ一両日御止マリ相成候間六畳の夜具ヲ出し食事等不都合無之様相頼ミ候　何か新しき魚抔差上被下度候

且又蛇頭初メ所有の地所不残御案内申被下度　次第ニ依リ直チニ地ならしニ着手相成候事と存候間作物等取片附の必要モ可有之　是ハ先方ニ能く伺ひ被下度候

且又平潟の大工小倉源蔵ニ十五日午後ヨリ五浦ニ参リ候様此手紙着手次第御通し被下度

御着の時刻ニは先生方ヨリ電報ニて御知セ可致候

先は右用事迄

六月十三日　　岡倉

矢部清助殿

河合寅次殿

奥の茶の間塗檀司の引出しに奥さんの単物三枚幷ニ帯有之

右ハ先生方ニカギヲ渡し置候間先生方ニ御持帰相願置候

宜敷御取計被下度

同じ六月十三日には、もう一通、黒沢吉次郎宛に同趣旨の書簡を出している。(前出 32 ページ)　こちらでは、大工の小倉源蔵に工事を頼んで良いものか、迷っている様子が解る。この手紙に続いてすぐ、矢部清助・河合寅次宛に追いかけて手紙を書いている。

先刻大工小倉源蔵ヲ十五日ニ呼寄セの事申入置候へ共大工の事ハ紙や様ニ相談候事可然存候間小倉呼寄セの事ハ御見合セ置被下度候

先生方ハ多分十五日十二時頃御着と存候

六月十三日

清助殿

寅次殿

結局この時天心は、小倉源蔵に工事を依頼し、直ちに建築が開始されたものと思われる。

263　九月四日　黒沢吉次郎あて　封書〔封筒ナシ〕

拝啓　益々御清適欣賀之至ニ候

五浦普請ニ附テハ引続き御尽力被下候趣感謝致候　小生事昨夜越後ヨリ帰京候処大工源蔵より下村木村両君家屋出来候趣にて金員要求の由承り候ニ付何れ両君ヨリ精算の上御送金と存候へ共大工の都合モ可有之存候間不取敢小生ヨリ別紙小切手金弐百円也振出候間当人ニ武子銀行ニて取付候様御話被下度

小生モ不日五浦へ参ルへく其節万事可申述候　　忽々頓首

九月四日　　岡倉

黒沢様

相当な進捗振りで、五浦の建築は進んでいる。紙や（屋号）の黒沢吉次郎の尽力が大きかったものと思われる。『岡倉天心』で述べているように（前出47ページ）四人の画家の住居と研究所は、同時平行的に進められ、小倉源蔵の采配のもとに、多数の大工が仕事にかかったものであろう。源蔵の娘島田きち氏がいうように、一回に一斗の米を炊く程、多勢の職人がいて、約束の期日をめざして働いていたのである。(註16)

十一月九日には、天心が中国旅行で不在中にもかかわらず、四人の画家は、家族ともども五浦に移り住んだ。天心が翌年三月十四日、中川忠

順宛に出した手紙では、次のように述べている。

拝誦　御懇切なる御書面に対し感謝の至奉存候
小生事此度の会議ニハ是非共出席可仕来ル廿四日ニハ必ス出京ノ考ニ御座候　万一其前御打合わせの必要有之候ハヽ被仰越度候　御用の御都合にて御来浦相成如何や　美術院一部モ建物落成　大観子等の住居モ見事ニ出来上り候　御一覧被下度
片野君御同伴両三日海辺の春ヲ御覧ニ相成てハ如何にや　怱々頓首
三月十四日　覚三
中川老兄
小生多少旅の労れ有之廿三四頃迄ハ此ニ休養致度考ニ御座候へ共会議前緊要の御協議モ候ハヽ其前出京致成ルへくハ廿四日過ニ致度考ニ候

中国旅行を終り五浦に戻った天心が、古社寺保存会議に出席の返事の後に、留守中完成した建物に触れ、五浦へ来るように誘っている。この中で、「美術院一部モ」とある建物はどれを指すのであろうか。前出の『父岡倉天心』にいう十月十五日までに完成すべき「四人の住居ならびに研究所の五棟」との関係はどうか。四人が移り住んだ事から見れば、大観・春草・観山・武山の住居が完成したことは間違いないだろうが、研究所建物は、どれが完成し、どれが未完成であったか、知る手掛りは全くない。

1　正員画室棟（仮称）

建物の規模や形を具体的に知る手掛りとしては、従来知られているものとして、前述の斉藤隆三、岡倉一雄の記述があるが、写真は、研究室内で四人の画家が絵絹を前にしている場面と、『岡倉天心』（斉藤隆三著創元社）185ページにある不鮮明な写真しかなかった。先年平凡社が『岡倉天心全集』を編集するに当たって、沢山の資料を集めた中に、研究所を対岸の岬上から撮影した写真（本号口絵参照）がある。この写真と従来の資料を照合した結果、研究所の画室に関しては、ある程度はっきりして来た。次にその概要を述べよう。

四人が絵絹を前にした写真は、明治四十年頃、小峰良亮（こみねりょうすけ）が撮影した（註17）ものである。春草は眼病治療のため、四十一年の五月に東京へ移住しているので、それ以前であることは間違いない。写真から判断できる間取は次の通りである。

正員画室は、琉球畳を縦方向に五列並べ、奥（北側）から七畳分が確認でき、日本美術院史に述べられた「三十五畳敷」を裏付ける。右側（東側）はガラス障子（腰板があり、その上部が二列四段のガラスになっている。）があり、その寸法は通常のもの（五尺八寸×三尺）と判断できる。正面は襖で四枚分、その左側三尺分が真壁である。向かって左側面は、一番奥三尺が板戸で左外開き、そのつぎ二間が真壁、次手前一間が押入れ、次の一間は三尺張り出した板の間で、流しの上に蓋付の水桶が置いてある。写真では見えないが、その左側に井戸へ通ずる戸があったであろう。そのまた手前は一部しか写っていないが押入れと思われる。

奥の天心の室は、画室との境の襖が左右に開いた、一間の部分から見える。奥右側に押入れが見え、その右端は、ガラス障子の延長線上にある。その左は書院（奥行は三尺であろう。）で、縦三尺二寸横一尺五寸

ほどのガラス障子が三枚分（実際にあるのは四枚）確認できる。畳は奥に二間半だけ確認できるので、日本美術院史にいう「十畳ほど」に符合する。

右の結果に、平凡社蒐集の写真を照合して見る。正員画室棟（仮称。以下正員棟と略）は、屋根が木羽葺で棟だけが瓦である。屋根の型は右側（北側）が入母屋、左側は手前の小家屋にかくれているが、『父岡倉天心』185ページの写真で入母屋と確認できる。東面は、北から三間の部分が、腰羽目の上にガラス戸（三尺×三尺）であり、中柱を狭んで各三枚ずつになっている。これが天心居間の東側面に相当する。その南側（写真では左側）に、二間ずつ間をおいて柱が三本、次が一間半の所に柱が見える。柱と柱の間は暗く、敷居相当の部分だけが明るく写っている。この写真から次の事が推定できる。柱の間に何も見えないのは、戸や障子がないことであり、吹放しの廊下である。あるいは雨戸のみがついていて、南側小家屋の陰になっているところに、戸袋があったかも知れない。廊下は東側（写真で見る正面）は三尺、鍵の手に曲って南側は六尺であろう。南側外壁は『岡倉天心』の図版で見ると、真壁であり、一番西側三尺が板戸と見えるので、恐らく出入口であったろう。建物の南北は十一間、東西は三間半（最大巾）となり、三十三～五坪の面積と推定される。

2　研究会員画室棟（仮称）

研究会員画室棟（以下研究会員棟と略）は、正員棟から南へ三～四間隔てて、一段低いところにあった。建物の主軸は、正員棟に対して三十度位傾き、湾に沿う形で、くの字なりに位置していた。写真では樹木にかくされて両端がはっきりしないのと、光線の方向が悪く、壁物の東壁が日陰となって居り細部が不明である。『岡倉天心』の写真と照合して推定すると、次の通りとなる。

研究会員棟は、南北八間（最長）東西二間半、十九坪である。

屋根は木羽葺、棟が瓦であることは正員棟と同じである。屋根型は北側は切妻、南側は入母屋と考えられる。南側には更に切妻屋根の一坪の小屋（便所または物置）が接している。

3　その他の建物

正員棟と研究会員棟の間に南北一間半、東西二間（？）の建物がある。その南側に約四十五度の階段があり、研究会員棟と連絡していたものと思われる。この建物は、『岡倉天心』の図版では確認できない。

小家屋の西側に、小使の名取幸次郎の居住する建物があった。『岡倉天心』の図版で見ると、二間半×一間または一間半の寄棟瓦葺の建物と、切妻の建物（二間半～三間×二間）があったようである。

現在『日本美術院研究所跡』の石碑の立っているところが、正員棟と研究会員棟と小使室の真中辺りになると思われるが、あまり明確ではない。

現在この地は『天心遺跡記念公園』となっているが、昔日の悌を偲ばせるものは、敷地西端にある一箇の井戸のみである。

# 第三章　五浦の海と天心

## (一)　釣

天心が晩年の十年間、内外に活躍した疲れを癒すため、五浦の海に舟を浮かべ釣糸を垂れたことは、衆知の事実である。『父岡倉天心』では、五浦の地を発見する道すがら、釣を楽しんでいるような記述（前出28ペ

ージ）があるが、天心自身が釣について書き遺したものとしては、明治三十七年十月二十一日付で、ガードナー夫人に宛てた手紙が、最初ではないかと思われる。

親愛なるガードナー夫人

今度の日曜日にはおうかがいできなくなり、残念至極に存じます。弟子たちも同じように残念がっていると思います。――もっとも、カーチスはまだがんばっています。――潮もよし、魚もよし、舟は非のうちどころなし――まちがいなくこれが今年最後の釣になるでしょう。残念です。

敬具

岡倉覚三

（追伸略）

この年二月十日、日露開戦の日、天心は横山大観、菱田春草、六角紫水を伴い渡米した。画家ラファージの紹介で、ボストン社交界の女王ガードナー夫人宅をはじめて訪問したのが三月二十七日、その後たびたび同夫人を訪れ、時には宿泊をするなど、親交を深めている。

翌三十八年三月に帰国して後は、五浦で釣糸を垂れる機会が多かったようである。『父岡倉天心』202ページには次の記述がある。

五月、六月といえば、例年のごとく降りみ降らずみの五月雨の気候である。二年越しの渡米訪欧に気を腐らしていた天心は、常陸五浦の海荘に行季を解くや、五月晴の日を選んでは、洋心に小舟をうかべ、好きな釣魚三昧に耽っていた。彼は五浦の地に別墅を営んで以来、渡辺千代次（註18）という正直な青年を常備の操舟者に選み、そのころではまだことごとくに刈りとられずに、すこぶる豊富であったカジメ、若布などの海藻が海底の大森林を形作っていた、暗礁がちの沖中に乗り出して、饒多な磯魚を漁っていたものだ。しかるに明治三十八年の帰朝にさいしては、馴染の千代次に差し支えを生じたため、大津町の漁民を物色して、渾名を「地蔵」という結構人を雇い入れた。彼が残した『釣魚日記』（註19）にも、「渾名を地蔵と称ぶ漁人を雇い入る。その人微恙ありし為め、沖中漁業に従事し得ざるを以て、この漁期は止まって家に在り。幸にして余が操舟の友となれり」という意味が書いてある。とにかく、魚は上述のごとき環境であったから、ふんだんに棲息していたものの、天心その人の釣技もまだ堂に上らず、アイナメ、ドンコなどのごとき磯魚を相手とする範囲にすぎなかった。したがってその乗用する小舟のごときも、ここらでテンマと称する月並みのもので満足していた。

翌六月から翌々七月まで、「地蔵」に舟を操らせながら、晴れれば、かならず洋上の人となっていた。そして半日の漁撈で、一家の食膳に余るほどの獲物をせしめていた。（中略）

八月の後半月と、九月いっぱいと、約一カ月半のあいだを、好きな釣魚三昧に過した彼は、ボストン博物館との約束（註20）が迫るにつれて、かなりの荒天を冒してまで海上の人となっていた。ある時などは大津の鉄某の鰹舟に便乗して沖中に鰹釣を試みたこともあった。そのころの鰹舟は乗組の舸児揖取を合わせて、わずか十余人にすぎず、もっぱら動力を、櫓を操る人力に委頼していた。魚の動きの関係から、鰹が浜近くやってくるといわれる中秋のころとはいいながら、「舟方」

どもが「宮の松一抔」と言っている大津の郷社、唐帰神社の叢松が、水平線上に隠見する個所まで出漁するには、容易なことではなかった。幸いに天心の便乗した日には、ときどき小雨がぱらつくくらいの曇り日ではあったものの、海はすこぶるおだやかで、魚に食気がたっていた。天心は総乗組員が片舷に整列して、物干竿のような、長い釣竿を操り、あたかも戦争のような漁撈をはじめる異様な風景を、副船長格の「おやじ」のかたわらで艫から眺めていた。彼はあたかも梭を投げるように、舟底を縦横する魚群に唆られて、たずさえて行った手釣道具を取り出し、背黒鰯の生き餌をつけると、海中に投げこんでみた。すると潑剌とした群青色の鰹が、二尾三尾、つづいて彼の鈎に上ってきた。大漁の幟を押したたて大津の漁港に凱旋するまでには、手釣りで釣った彼の漁獲は、十尾以上に達したということである。いったい、手釣道具で鰹を釣るなどということは定石以外のやり方だが、それをあえてしながら、かほどの獲物をせしめたことを、天心の釣上手の証拠であると、いまでも大津の商人などは噂しているが、それは畢竟「陸者」と舟方から馬鹿にされている人たちの談で、この鰹釣りが、彼の釣上手という証拠にはなるまい。

天心の釣に対する熱中ぶりを、いきいきと描写している。鰹釣に関する評価などは、身びいきにおち入らず、岡倉一雄は正当に断を下している。三十八年七月に、天心は東京の田代病院で痔の手術を受けている。連日の水上生活が禍いしたかと、岡倉一雄はいっているが、手術が済むと早速五浦に帰り、釣に興ずる天心であった。

日本美術院史には、当時の天心の様子を偲ばせるエピソードが多く掲載されているが、天心の釣舟の船頭をつとめた渡辺千代次の談を引用しよう。（註21）

旦那（天心）はワシのことを千代サンといって可愛がってくれましたが、何しろ古いことで忘れたことも多うございます。兎に角偉い人だと思っていました。（中略）

東京へ時々出てゆく外は、六角堂へこもってお経を読んだり、漢籍を読んだりしましたが、それ以外はワシに舟を漕がせて魚釣りでした。青畳のやうな海の上で釣をする位ゐいいものはないと、切れの長い眼を細くしながらいはれたのを覚えてゐます。釣の道具も自分で考案したもので、鈴をつけてかかるとすぐ判るやうにしたり、糸巻から糸が走り出すやうな仕掛けを工夫して、当時から遣っていました。釣れなくなると本を読み出すのですが、本を読み出すと今度はいくら大きいのが釣れても見向きもしませんでした。兎に角恐しい度胸のよいことで、いつも二里三里位沖へ出るのですが、幾ら海が荒れても、自分から帰らうといったことはありません。どうかすると舟が物凄い波をかぶる時でも、チョッと横になるといったかと思ふと、もう軽いいびきを立てて寝てしまったものです。

兎に角、海はお好きだったので、風の強い時でも、濤の荒い時でも一切頓着なく、出ようときめられた以上きっとお出かけになったもので、ワシも拠なくお供したのですが、それを横山先生や下村先生が、殊の外に先生のお体を案じられて居ます所から、この海の荒いのに又しても千代次がお連れするといっては、ワシがわるものにされたものです。実際はワシがお連れ出すどころか、迷惑したものでした。（後略）

再び、『父岡倉天心』（218ページ）より引用する。

天心はその居住する邸宅がかく落成するとともに海上に乗りだす釣舟の建造をも忘れていなかった。杉造りの小舟ではあったが、柾の通った用材を用い、まずここらの浦々では、優秀な釣舟ができあがった。天性舟に強い天心は、多少の風浪があっても、相当沖へ乗り出すので留守を守る元子が、まず心配しはじめた。しかしいくら諌めても、出漁を思いとどまる彼ではなかったから、何かいい方法もないかと、四画伯の助力を求めたのであった。だが、彼らとしても別にいい知恵はない。すると下村観山が「何か先生の舟に目章をつければいいでしょう。そうすれば、万一の場合、すぐに救助の舟を出すことができます」と建議したのを入れて、建議者の下村観山自身が、筆をとって目標に何かを描くことになった。ある日、操舟者の千代次が、この新造の釣舟を小五浦の砂浜に引きあげていると、自宅からおりて来た観山は、かねて用意してあった白ペンキ、黒ペンキ、トノコなどを用いて、一気呵成に鷗二羽を舷側に描きなぐった。爾来、天心は、絵に因んで、この舟を「かもめ」とよんでいた。そして、この舟はつぎの釣舟竜王丸ができあがるまで、いつも小五浦の砂浜に曳きあげてあった。

天心が、渡辺千代次に舟を操らせ、あるいは、鈴木庄兵衛を釣の師として、しきりに海に乗り出していたとき、もっともその身を気づかったのは、天心夫人基子であったことは確かであったろう。わざわざ新造の釣舟を作るほどの熱の入れように、大観や観山にぐちをこぼしたのかも知れない。諌言しても聞き入れる天心でないことは、弟子たちがよく知っている。観山が目印にかもめを描いたのも、実際の役に立つということより、基子夫人を安心させるためではなかったか。舷側に描いたかもめの絵も、沖合数キロまで出てしまっては、見分けがつかないだろうし、エンジン付の舟のなかった当時としては、事故が起こってから救助に向かっても、間に合う筈がないからである。

天心が釣に関して研究工夫を重ねていたことは、千代次の談（前出52ページ）にある釣の道具の考案（註22）をしたことや、魚の種類ごとに釣の指導者を求めた（清見陸郎『天心岡倉覚三』304ページ）などでも解る。

大津小学校で講演をしたとき、大方の意表をついて、釣の話で並居る漁師たちを驚かした（註23）ことなども、自分なりに釣の極意と人生とを較べてのことではなかったろうか。

初期のころは磯魚で満足していた天心も、やがては目標の魚種を決めて漁に出るようになるのである。渡辺千代次から、五浦の魚の状態を知らされた在京中の天心は、「サンマ、タコにては帰浦見合わせ候　何か外に大漁有之候ハ御報被下度候」（明44・10・21）と答えている。

天心の釣日記『六物記』は、飛田周山が所有していたもの（現在は所在不明）というが、五浦に滞在していた時期の、ほとんど毎日を釣にあてていた様子がうかがえる。四十四年十一月から五十五年にかけてのこの時期の日記には「むつ子を読む」という表現が数箇所出ていて、むつに目標を定めていたことが解る。『六物記』の表題は、飛田周山か斎藤隆三がつけた（註24）というが、むつを六にかけて命名したのかも知れない。岡倉一雄によると「釣日記」を三十八年頃もつけていた（前出51ページ）とのことであり、天心は相当な熱を入れていたものらしい。

大正二年、アメリカから帰国した折には、自ら工夫した釣舟の模型を

持ち帰り、日本で造らせた。風浪にたえるようヨットの安定機構を取り入れ、舟の中央部に細い孔を設け、七貫目の真鍮板を上下して、舟を安定させると共に帆を操るように、和舟を改良したものという。模型では二本の竜骨の間に、真鍮板が挟まる形であったが、砂浜へ引き上げる都合上、平底に変えられた。（註25）　この舟は竜王丸と名づけられ、天心の期待が大きかったが、病勢つのる天心は、数回乗った程度で終ったらしい。現在本研究所で保存している竜王丸は、底の部分が一部欠失、真鍮板および上下機構、真鍮板周囲（水よけ）や帆柱も失われているため、元の状態は不明である。真鍮板は第二次大戦中に供出したという。舟は全長四・七九メートル、最大巾一一〇センチ、舷側深三四・五センチであり、真鍮板孔は、長さ八五センチ、巾一・一センチ、両端が少し巾広になっている。長さ一六六センチの櫂が附属している。

この舟の完成を知る書簡が、『岡倉天心全集』（平凡社刊）第七巻に二通収められている。

672七月六日付　鈴木庄兵衛あて

本日東京へ参り十五六日頃帰荘之積りニ御座候

七月六日　五浦　岡倉

龍王丸の帆幷ニ試航海宜敷御願申上候

また七月七日付の、プリヤンバダ・デーヴィー・バネルジー夫人宛の書簡では次のように述べている。（『岡倉天心全集』第七巻273ページ）

――三日前、私は新しい船を進水させました――龍王（ドラゴン・キング）丸です。設計は私自身がやりました――日本の漁船とアメリカのヨットの組合わせです。まるで優秀な水夫のように見えます。今年の夏は大半海の上で暮らすでしょう――私は喜びの大洋に漂っているのです。

## (二)　雅号

岡倉天心が五浦を愛し、五浦と一体化したかと思われる様子は、雅号にもよく現れている。手紙の署名その他に、五浦や五浦の生活に関連した雅号を多く用いているが、『岡倉天心全集』（平凡社刊　第六・七巻）に収録された書簡から、その有様を見てみよう。

同書に収められた書簡は総数六九七（封筒のみのもの、電報をも含む）に及んでいるが、そのうち明治三十六年五月以前のもの（書簡番号1～161　天心が五浦を訪れる以前のもの）については〔　〕の中に示し、外国人宛のものは雅号を使わないのが通常と考えられるので、別枠とした。封筒と本文の署名が異なる場合は、本文の署名を採用した。

| 署名 | 数 | 初出年月日および宛先 |
|---|---|---|
| 岡倉 | 45 | 明・38・5・31　米山辰夫 |
| 覚 | 〔2〕 | 〔明・22・10・9　松本平吉〕 |
| 岡倉覚三 | 46〔44〕 | 〔明・15・1・13　伊沢修二〕 |

| 天 | 天心生 | 天心 | 三太夫 | 鉄脚道人 | 伯父 | 兄 | と と | 父 | 岡倉老人 | 岡倉生 | 覚三生 | 覚三 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 2 〔1〕 | 30 〔3〕 | 41 〔7〕 | 〔1〕 | 〔1〕 | 1 | 7 | 1 | 18 | 1 | 3 | 〔1〕 | 29 〔92〕 |
| 〔明・36・2・5〕 | 〔明・20・10・12 | 〔明・33・5・15 | 〔明・23・・31 | 〔明・28・12・31 | 明・42・1・9 | 明・38・5・29 | 大・2・5・18 | 明・36・8・6 | 大・2・3・24 | 明・38・6・15 | 〔明・25・6・7 | 〔明・13・11・27 |
| 岡倉基子 | 九鬼隆一〕 | 剣持忠四郎〕 | 饗庭篁村〕 | 剣持忠四郎〕 | 岡倉韓一 | 岡倉由三郎 | 米山高麗子 | 岡倉高麗子 | 富田幸次郎 | 関根黙庵 | 丸山貫長〕 | 駒井道義〕 |

| 碧龕老人 | 碧龕子 | 碧龕生 | 魚龍庵主 | 五浦釣翁 | 五浦釣徒 | 五浦老漁 | 五浦道人 | 五浦兄 | 五浦老人 | 五浦 | 五浦生 | 天心子 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 3 | 8 | 1 | 1 | 10 | 1 | 1 | 1 | 12 | 8 | 36 | 1 |
| 大・2・3・10 | 大・1・12・21 | 明・45・7・22 | 明・40・9・15 | 明・42・2・23 | 明・41・9・9 | 大・2・5・8 | 明・45・4・24 | 明・42・2・3 | 明・42・5・21 | 明・39・5・14 | 明・38・9・26 | 明・40・2・18 |
| 早崎梗吉 | 早崎梗吉 | 中川忠順 | 中川忠順 | 橋本秀邦 | 下村観山 | 中川忠順 | 新納忠之介 | 山田蝶子 | 安田靫彦 | 山田蝶子 | 黒沢吉次郎 | 長尾雨山 |

| | | |
|---|---|---|
| 月泉翁 | 1 | 明・40・9・21　菱田春草 |
| 赤倉 | 1 | 明・40・6・16　矢部清助 |
| その他 | 封筒のみ6　無署名5〔2〕　職名3<br>代筆3　外国人宛207〔7〕 | |

雅号のうち「天心」を使用しているのが、最多であるのは当然としても、それに次いで「五浦生」の多いのには驚かされる。「五浦」を冠した署名を合計すると、七十通にも及んでいる。地名に関した署名としては、他に「赤倉」（赤倉滞在中発信）が一通あるのみで、いかに五浦に執着しているかが解る。

釣に関しては、「五浦釣徒」（平櫛田中作の天心釣姿の像が、「五浦釣人」と命名されているのは、これがもとになったものと思われる。）が十通ともっとも多く、「五浦釣翁」「魚龍庵主」「五浦老漁」がそれぞれ一通あり、天心の釣に対する情熱をうかがわせる。

「月泉翁」は、明治四十年中秋の観月会にあたり、準備をしている菱田春草に宛てた書簡にあり、他には例を見ない。

ここに注目すべき雅号として「碧龕」がある。「碧龕生」（8通）、「碧龕子」（3通）、「碧龕老人」（1通）となって居り、他の雅号と較べても、少い数ではない。

この号については、岡倉一雄が『父岡倉天心』の中（246ページ）で、次のように述べている。

四囲の環境に馴れているボストン美術博物館の日本流の自室に落ちついて、ペンを執ってはみたものの、とかく気分がすぐれない日の多かった天心は、博物館長やガードナー夫人をはじめ、交友多数の勧説に従い、マサチューセッツ州山間の勝地に風塵を避け、もっぱら静養に努めていた。このさい、若葉に蔽われた四囲の山容を眺めいって、みずから別号を碧龕とよぶことになった。で、前年支那より将来した黄金より高いといわれた稀有の印材に、この新号を刻ませて秘蔵していた。米国には漢字を篆刻する名匠が見当らないので、この玉印は、はたして故国のだれにその制作を嘱したものかは、今にいたるも知られない。私は翌大正二年の四月、天心が最後の帰朝をしたときに、この玉印を見たことを覚えている。

この記述をもとにしたと思えるが、清見陸郎も「天心岡倉覚三」の中で、「マサチューセッツ州の……青葉若葉に蔽われた四囲の山容に眺め入って、「碧龕」の別号を思いついたと伝えられる。」と述べている。

「碧龕」の印は、本研究所蔵品のうち、二点に押捺されている。ひとつは、天心がガードナー夫人に献じた劇詩「White Fox」のタイプ文書である。タイプ浄書を手伝ったディッキンソン嬢（後にラングドン・ウォーナーと結婚）に対する謝辞に付して「碧龕」の朱印が押されている。もうひとつは、天心が最後の帰朝の際に、蜀中雑吟の漢詩を書して、富田幸次郎に与えた扇面（現状は軸装）である。

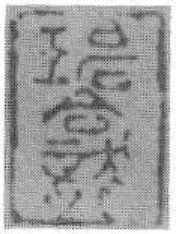
印は縦十一ミリ横七・五ミリの長方形で、朱文である。

『岡倉天心全集』（平凡社刊　別巻）の年譜には、明治四十五年七月二十七日の次に「このころ碧龕の別号を使う」とあり、書簡に「碧龕」

の号を使用した日時に、ほぼ符合している。

実際に天心が「碧龕」の号を思いついたのは、それより少し遡った頃である。明治四十五年五月二十七日、中国旅行中の天心は、日記の中に、「碧龕」の二字　牛氏の彫刻ヲ約ス」と記して居り、その時点で既に、「碧龕」を使用することを決めていた。岡倉一雄は、中国で求めた印材を、アメリカに彫る人がないので、日本人に彫らせたと解釈しているが、事実は日記の通りと思われる。天心が北京を出発したのは、六月一日頃であり、時間的に見て牛氏（他にその名が出て来ないので、詳細不明であるが、中国人の篆刻家であろう。）が彫刻を完了する余裕はあったと思われる。

**碧龕の落款**



「碧龕」の号を明治四十五年五月までに思いついているとなれば、マサチューセッツ州山間に静養したのは、印を作ってから十ケ月の後であるから、「碧龕」を思いつかせた動機は、別に求めなくてはなるまい。

筆者は、「碧龕」の雅号を思いつかせたものは、五浦ではないかと想像する。五浦の岩壁には、数箇の洞窟が波に洗われている。潮の引いた時に、洞窟へ舟を漕ぎ入れた天心が、海の青を映し出した岩壁に囲まれて、実感した言葉と考える時、いかにもふさわしいように思う。「へきがん」の音は、恐らく『碧巌集』（碧巌録ともいう）から連想したものであろう。明治三十八年十月末日、渡米の船中にあった天心は、高橋太華宛に手紙を書き、『碧巌集』を他の書籍と共に注文し、アメリカへ送ることを依頼している。

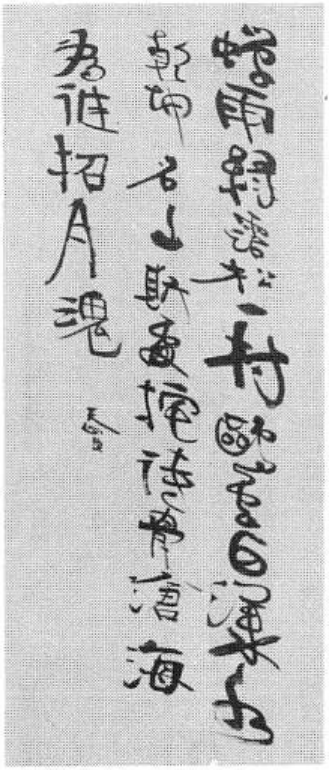
横山大観が五浦の自邸の直下にある『鉦皷洞』にちなんで、「鉦皷洞主人」と称し、東京池の端の邸にも「鉦皷洞」なる一室を設けていたことを考え合わせれば、連日のように舟を出し、五浦の岩壁を眺めていた天心が、洞窟の存在を強く意識することがあっても、不思議ではないと思える。

### (三)　詩歌

蝉雨緑霑松一邨　　蝉雨　緑に霑う　松　一邨
鷗雲白掠水乾坤　　鷗雲　白く掠む　水　乾坤
名山斯處托詩骨　　名山　斯処　詩骨を托す
滄海爲誰招月魂　　滄海　誰が爲に　月魂を招く

明治三十八年八月三十日『日本美術』第七十九号に発表された「五浦即事」である。（『岡倉天心全集』第七巻338ページ）一部字句の異るものが、他に三例あり、当研究所に横山静子氏（大観夫人）から寄贈されたものは、松一邨が松一村、鷗雲白掠が鷗雲白漾、托詩骨が挖詩骨となっている。（左写真）

この詩の中の、「鷗雲」の解釈を、全集の解題では「鷗のように白い雲」



五浦即事

としている。（七巻503ページ）　それを特に否定するつもりはないが、別の解釈もあり得ることを指摘して置きたい。

渡辺昇氏（渡辺千代次長男）が語るところによれば、天心は、海面に群がる鷗を見て、千代次に「あれは何だ」と質問したという。千代次は「あれはえどこ（餌所の意か）と言って、鰯が鰹などの大きな魚に追われて水面近くに上って来る。それを鷗がねらっている所です。」と答えた。それを聞いて天心の作ったのが、五浦即事の詩であるという。

この説明から考えれば、天心の意図は「鷗雲」を鷗のように白い雲でなく、雲のように群がった鷗として、表現していることになる。水面をかすめて鰯を漁る白い鷗の群を想像する時、活きいきとした五浦の景観が眼に浮かんでくる。白く掠むの言葉もここで生きてくるのである。

本研究所蔵にある「鷗雲白漾」（鷗雲白くただよう）は、前者にくらべてやや静的であり、ようやく肉体の衰えを自覚した、天心の心の反映でもあろうか。

八大龍王畫贊

玄天風静
慈海波寧
布帆無恙
永仰威靈

碧龕居士拜贊

八大竜王画賛

玄天　風　静かにして
慈海　波　寧かなり
布帆　恙なく
永く　威霊を仰ぐ

碧龕居士拜賛

釣の師鈴木庄兵衛から依頼されて、平潟町小船組合のため、橋本永邦に描かせた「八大龍王画」に附した画賛である。現在この画は、平潟漁業組合が保管している。

プリヤンバダ・デーヴィー・バネルジーあて書簡（大正二年五月二十五日付）の中に、次の記述がある。

ずっと昔、私は狩猟に熱中しましたが、今は釣りに夢中です。昨日、今夏初めて海に出ました。もっともこれは主として夢を釣るため、また苦悩の想いから逃げだすためのものでしたが。夏になると、私はほとんど毎朝釣りに出ます。二時か三時には起床し、波の上で朝食をとり、正午まで、時には書物を読んだり、また海のロマンスと戯れたりしてすごします。私の船頭は年とった海の民で、全生涯を海の深みと心通わせて生きるすべての漁師同様、水の種族の流儀で育てられた一個の哲人です。生れながらの詩人です。なぜなら、彼は海の神秘をも危険をもひっくるめて、海を読むことを知っているからです。私たちは親友で、私は彼にインドの話をしてやります。彼は龍王崇拝者ですナーガラージャ
――すなわちあなた方から受けついだ龍王。お会いになればたぶん彼をお好きになるでしょう。

この手紙の中で私の船頭とあるのが鈴木庄兵衛であり、インドのナーガラージャの流れをくむ八大龍王を、彼が信仰していることを伝えている。天心が自分で設計した舟を、龍王丸と名づけたのも、いうまでもなく、八大龍王に因んだものである。

遠慮めさるな浮世の影を　花と夢みし人もある

さつき闇夜の雲間をあけて　何を未練のほととぎす

五月闇よの雲間を分けて　何を未練なほととぎす

吹けよ浦風そよそよ吹けよ　松は苦しき聲がする

色は變るな墨畫の松よ　雪に折れたら折れるまで

おらが女房に無心がござる　夢に松風暮の雲

五浦時代の句で、一句から、春夏秋冬の句であるが、叙景の句でなく、天心が心のつぶやきを書きとめたと考えるべきであろう。事、志と異り日本美術院も衰退して、五浦に再起を図ったが、世評は必ずしも好意的ではない。冬の句には、志半ばにして破れることがあろうと、節操は貫くという姿勢の表現である。恐らく文展開催より前の頃の作であろう。

明月や大観春草なく夜かな　盲者にも萩と桔梗の影触れて　露は涙の理想なきなり

五浦へ移転した四人の画家の生活は、決して容易なものではなかった。観山・武山はまだしも、朦朧体と悪評された没線描法を、敢然として押し進めた大観・春草の二人は、絵も売れず苦しい生活が続いた。日本美術院の後援者であった辰沢延次郎が、この窮状を見て、天心にどうするのかと問いただしたところ「好きで選んだ道であるから飢えても仕方がない。いよいよせっぱつまったら、自分は米をやるから、あなたは着るものをやってくれ。」と答えたという。

盆　唄

五浦よいちょころぢゃアナアナ　勿來の南　候らばヱ　夜半の千鳥を
ナアナ　ソラアナ　寝て聞いちょる候らばヱ　ピピピピイ〳〵

五浦の天心邸を訪れたことのあるサースビー姉妹が、この唄のローマ字訳（天心自筆のペン書き）を所蔵していたという。五浦の話を彼女たちに聞かせながら、興に乗っては自作の盆唄をうたい、喝采を受けて喜び即座に書いて与えた、そんな想像をかきたてられる。

われ死なば　花な手向けそ　浜千鳥
呼び交う声をかたみにて
落葉のかげに埋めてよ
十二万年明月の夜
訪い来んひとを松の蔭　（註26）

天心の辞世の唄として知られているものである。これと同じ内容の英詩を、天心は、プリヤンバダ・デーヴィー・バネルジー宛書簡（大正二年八月二日付）に記している。その詩は、彼女へ寄せる天心の情をうかがえる表現であり、岡倉古志郎氏は英詩を元歌と解釈して居られる。「訪い来んひと」がプリヤンバダ・デーヴィー・バネルジーであることはいうまでもない。（註27）

ともあれ、この唄から、五浦の天心の墓を想い起こすのは、筆者ひとりではないだろう。土饅頭のほかには墓石もない簡素なこの墓は、波音の聞える松林の中に、ひっそりと静まっている。五浦を愛し、五浦に籍まで移した（註28）天心は、愛嬢高麗子と、その夫米山辰夫の墓の近くに永遠の眠りを続けているのである。（註29）

終

補註

（1）常磐線の名称は、明治三十九年十一月一日に国有化されてからのものであり、この時点では海岸線と呼ばれていた。

（2）天心は明治三十四年十二月七日、常陸丸で門司を出航、インドに向かった。約十ケ月のインド滞在ののち、三十五年十月三十日に帰国した。

（3）現在の常磐線内郷駅

（4）北茨城市大津町西町にある旅館。経営者は代替りしているが、建物の一部には当時のものが残っている。

（5）『岡倉天心』（斎藤隆三著　吉川弘文館　昭35）の177ページには、「勿来（なこそ）駅に下車し、海岸を伝（ママ）えて五浦を訪ねた。」とある。

（6）『父岡倉天心』では、帰途八勝園に宿泊したことになっている。

（7）五浦七二七番の二は、明治三十二年十一月一日の時点では、畑五畝八歩と登記され、大正十一年十月十六日に合併登記して畑一反九畝二十三歩となった。同年十一月二日には地目変更して宅地となった。昭和三十七年九月二十日に合筆して現在の形になっているが、この時に測量した結果では、実面積が次の通りとなっている。（　）内は登記簿上の記載

①　七二七－二　一〇一〇・五九坪（五九三坪）

②　七二七－三　二七三・六六坪（二六八坪）

③　七二七－四　四八・〇　坪（　四八坪）

④　七二八－一　四一・一　坪（　四二坪）

（8）『岡倉天心全集』（平凡社刊　昭55）第6巻244ページ

（9）柴田稲作の曽孫（長男汎の孫）兵部氏の所持する位牌には、明治二十一年戊子六月四日没　齢六十八年四月　とある。

（10）柴田実氏、柴田兵部氏の談による。

（11）『図説北茨城市』（北茨城市史編さん委員会　昭58）202ページ

（12）『北茨城市名士録』（鈴木北州著　昭42）287ページ

（13）『図説北茨城市』168ページ

（14）オペラ歌手、エマ・サースビー（一八四五～一九三一　ニューヨーク生まれ）と、その妹アイナ・サースビー（一八五五～？）は明治三十六年春、日本へ旅行し、天心と知り合った。

（15）茨城大学五浦美術文化研究所報第九号（一九八二）155ページ

（16）同右155ページ

（17）同右156ページ

（18）渡辺千代次（明治十七年？～昭和三十九年）は、天心の釣舟の船頭をつとめた。

（19）『岡倉天心全集』（平凡社）には、明治四十四年から四十五年にかけての釣日記『六物記』が収められているが、ここにある三十八年のものは収録されていない。

（20）天心は、ボストン美術館の顧問となり、後に中国日本美術部長に

就任した。一年の半分をボストンで勤務する生活である。

(21)『日本美術院史』187ページ

(22) 天心の考案した釣道具の自筆スケッチが残っている。『岡倉天心全集』（平凡社）第五巻500ページ

(23)『日本美術院史』189ページ

(24)『岡倉天心全集』（平凡社）第五巻499～500ページ

(25)『父岡倉天心』248ページ

(26)『父岡倉天心』による。『岡倉天心全集』では一部字句が異なる。

(27)『父岡倉天心』275ページ

(28) 天心が明治三十六年に取得した土地、五浦七三三番ノ一、七三三番ノ二の登記簿には、明治四十一年七月二日受付で、四月四日転籍により、住所を五浦七二七ー三に変更する旨の登記がある。

(29) 天心の墓は、東京染井墓地にあるが、五浦にも分骨された。

## 参考文献


岡倉天心全集　平凡社　昭54～56

父岡倉天心　岡倉一雄　中央公論社　昭46

日本美術院史　斎藤隆三　中央公論美術出版　昭49

岡倉天心　斎藤隆三　吉川弘文館　昭35

図説北茨城市史　北茨城市史編さん委員会　北茨城市　昭58

北茨城名士録　鈴木北州　昭42

茨城大学五浦美術文化研究所報第九号　昭57


## 附記

先年、小説家のM氏から、本研究所に問合わせがあった。岡倉天心が購入した五浦の土地は、どのぐらいの面積か、という内容である。購入した土地の位置は漠然と承知していた程度であったので、問合わせに答えることはできなかったが、それを機会に、五浦における天心の事蹟を少しでも明らかにしておきたいと考えた。土地については、法務局へ行って調べるのが正確であろうと考えたが、これが意外に困難であり、三回足を運んだが、まだ十分に調査し切れていない。今回判明した範囲だけを報告して、他は別に機会を持ちたいと思う。

建造物に関しては、大部分が消滅して居り、残っているものも、補修の手が加わっているため、元の姿を復元することには、大きな困難を伴う。写真等の僅かな資料と、文献に記載された事項をつき合わせて、ある程度のイメージが浮かんで来たが、断定できるまでには程遠い。今後の研究にまちたいと思う。


今回の研究にあたって、次の方々から、貴重な御意見を戴くことができた。氏名を記して謝意を表する次第である。（敬称略　五十音順）

片岡久　川又正　佐藤瑛一　柴田信一　柴田兵部　柴田実　鈴木暎一　渡辺昇　渡辺やす

# 茨城大学五浦美術文化研究所
## 三十年の経緯を顧みて

西田　亨

昭和三十年一月五日、財団法人岡倉天心偉績顕彰会理事長横山大観氏より、茨城大学教育施設として五浦の天心遺跡（土地、建物その他）の寄付承諾を得た時点より満三十年が経過した。

また、昭和四十六年三月に所報第一号が発刊されて以来、今回は丁度第十号の刊行となった。

このことは、研究所が重ねて来た年輪の大きさを更めて感じさせると共に、一つの節目を迎えているとも思えるので、此の機会に研究所の歩んで来た経緯を顧みて筆を執ることとした。研究所のいきさつについては後藤末吉氏（編集部長）によって所報各号の彙報に、順次綿密に記されているので私の脳裡に浮かんで来るものの幾つかについて書いてみる。なお、所報に記された彙報については何れ、研究所沿革として一つに纏めておくべきであろう。

研究所の名称は、昭和三十一年四月に管理内規を制定した際「茨城大学五浦研究所」と仮称し、三十八年迄その名称を用いたが、同年八月「茨城大学五浦美術研究所」と改称した。更に昭和四十五年十二月「茨城大学五浦美術文化研究所」と改称して現在に至っている。研究所の性格を明確に示そうという意図と、またその幾分の変化にも対応して名称が改められたものと思う。

所員（兼任）は初期十名内外であったのが現在は二十一名を擁し、所長一名、研究部（部長・森啓氏）八名、資料部（部長・河内八郎氏）六名、編集部（部長・後藤末吉氏）六名に分れ、夫々業務と研究を分担しているが、専任の定員のつく体制が待望まれるところである。

初代所長は稲村退三氏（四十一年度）、第二代宮田俊彦氏（四十五、六、七、八年度）、三代石原道博氏（四十九、五十年度）、四代瀬谷義彦氏（五十一、二、三年度）、五代豊崎卓氏（五十四、五年度）、六代荒木修氏（五十六年度）　七代西田亨（五十七、八、九年度）となる。

初代所長委嘱は、研究所発足から十年後になっているが、この間の謂わば研究所草昧期における稲村先生の研究所に対する御尽力は並大抵ではなかった。また、溯って遺跡譲渡に関しては当時の学長東龍太郎氏のお骨折りが大きな原動力となっており、それを享けて都崎雅之助学長は、所内の整備補修、管理体制の確立等について熱心な御努力をされた。

今日の研究所の礎と精神はこの三先生によって築かれたものでその功績は大きく、吾々後輩所員が斉しく敬意と感謝の気持を抱く所以である。

所内管理のために、事務補佐員一名が常駐となっているが、緒方廣之氏は発足当初より五十七年度まで勤務された（三十二、三、四、五年度事務員、三十六～五十三年度事務官、五十四年度以降事務補佐員）。

氏は岡倉天心、日本美術院等に関する造詣と関心の深い方で御自身の生活をこの仕事によって統一されたと云える程所内管理の直接的任務に情

熱を持たれた。その功は称えられなければならない。
後任として平沢義一氏を迎えたが、惜しくも間もなく他界され、現在は五十八年七月より小泉道朝氏が任を継いでいる。

遺跡・遺構の保存については事務当局の不断の注意と補修、修復により天心旧居、六角堂は完全な状態で保存され、これに加えて平櫛田中氏の作品寄贈に基いて作られた天心記念館、ウォーナー像堂等があり、更に北茨城市、高萩営林署等の協力によって遺跡周辺の護岸、所内樹木の消毒等が施され景観も美しく保たれている。そのお蔭によって、五十八年三月、公益信託・山本有三記念第五回郷土文化賞を「天心遺跡が茨城大学によってよく保存され、郷土文化に貴重な貢献をした」として受賞した。選考委員長高橋健二氏の視察、委員の書類審査等で研究所の遺品、作品等収蔵品の保管、整備、所報の発行、公開の実績等も評価されていることは謂うまでもない。稲村初代所長、後藤所員に同行して頂き授賞式に出席した。なお所内収蔵庫は修復不可能のため取毀した。

世間の関心が高まるにつれ、研究所周辺が観光地化し、次第に俗化してゆくことから免かれたいが、これは北茨城市や県の協力を得る他ない。

研究所の一般公開は原則として一月・五月・十一月の年三回としているが、数年来五月および十一月の二回にしている。

資料部長の展示計画に基き、大学水戸地区キャンパス内の収蔵庫より展示品を五浦まで運び、五月初旬及び十一月初旬三乃至四日間、天心記念館に陳列公開している。

五十八年十月末、郷土文化賞受賞記念展と銘打って大学図書館の閲覧室二室を用い、学内特別展示を行った。

五浦が遠隔のため、学内一般の教官・学生・職員の一般公開日観覧がしにくいことを考えて初めての試みとして行った。つゞいて翌五十九年十一月初旬、同じ方式で学内展示を行った。

この様な企画をも含めて、学内に然るべき展示室が欲しいと云うのが所員の切実な希望となっている。

収蔵品は当初の遺品に加えて、種々の貴重な資料・作品等が寄贈されて次第に質・量共に増大している。資料部及び編集部の努力により、「収蔵品目録Ⅰ」を刊行し、所報第九号（岡倉天心生誕百二十年記念特集号）にも附録として合冊した。この目録は利用度が高いので引続き「収蔵品目録Ⅱ」を刊行し、全収蔵品を網羅して完全を期する予定でいる。

重要な文化財となった多くの収蔵品は、完全に保管する責任を愈々重いものとしつゝある。

前記の展示室と共に、それと隣り合った位置に「美術品収蔵庫」が絶対に必要であることを痛感する。

研究部の計画により、所員会議終了後の約一時間を用いて、所員の研究発表が行われるが、夫々異った研究分野の教官が所員として一堂に会し、他分野の研究を聴くことはまことに興味深く、多忙な研究生活の中では仲々得られない機会でもある。

折角の貴重な発表に対して、参会者が少くて勿体なく感ずることがあるが、これは更に工夫してより有意義な催しとしたいものである。

発表内容については、必ずしも岡倉天心と直接結びつくテーマでなくとも、広い意味で関りがあればよいという見地から、その教官の専門の研究の紹介等もあってよいのではなかろうか。

思い出す儘の簡略な記述となったが研究所の発展を祈って筆を擱く。

# 彙　報

（昭和五十七年十二月より
昭和五十九年十二月まで）

(1) 施設の補修等について

イ、収蔵庫の撤去

五浦の研究所敷地内にあった収蔵庫（33 $m^2$）は、かねてより老朽化が進んでいたが、屋根構造材が腐蝕し五十七年の15号台風で抜け落ちたので、その対策を検討した結果取りこわすことを決定し、昭和五十八年五月十二日に実施した。実施にあたり、写真および詳細な図面を作成し、資料として保存している。

ロ、六角堂附近の修復

六角堂東側の地面が一部崩れ、危険となったので、五十九年十二月に補修した。

ハ、マイク設備の設置

参観者に対する広報のため、昭和五十九年十二月二十九日に、マイク設備を取り付けた。スピーカーは長屋門と研究室に各一ケ所設置。

(2) 寄附受入

絵画　奥原晴湖筆『梅花半開』　紙本軸装

寄贈者　清水秀樹氏　　受入昭和五十九年六月十四日

書籍類

日本美術年鑑（一九八一）　東京国立文化財研究所

東京国立近代美術館年報　東京国立近代美術館

武蔵野美術大学研究紀要（No.15）　武蔵野美術大学美術資料図書館

58年美術家名鑑　株式会社　美術倶楽部

現代抽象展図録　株式会社　美術倶楽部

東京芸術大学美術学部紀要（第18号）　東京芸術大学美術学部長

(3) 受賞

公益信託　山本有三記念第五回郷土文化賞の対象に五浦美術文化研究所が選ばれ、昭和五十八年三月九日、主婦の友会館において授賞式が行なわれた。選定理由として次のように述べられている。

岡倉天心は一九〇六年（明治三十九年）大観、観山、春草、武山らと共に俗塵を避けて五浦に日本美術院の本拠を移し、美術革新の芸術活動を展開した。

六角堂など天心遺跡が茨城大学によってよく保存され、郷土文化に貴重な貢献をした。

記念品、賞状のほか、副賞として三〇万円の賞金がついているので、賞金については、奨学寄附金として受入れ、趣旨に添った使途を研究することとした。

(4) 所員会議

五十七年度第五回（58・3・17）

一　報告

① 郷土文化賞授賞式出席の件

西田所長　稲村初代所長　後藤所員の三人が出席した。

② 五浦管理人の件

緒方廣之氏の後任として、北茨城市中郷中教諭　平沢義一氏が四月から勤務予定である。

③ 臨時閉館

収蔵庫取こわしの為、四月一日から二十日頃にかけて、研究所の公開を中止する。

④　所報発行
所報第九号を昭和五十七年十二月二十六日付で発行した。
⑤　所長任期の件
議事
①　一般公開の件
五月の定期公開について、日程・担当者について検討決定
②　郷土文化賞賞金の使途について
図書・備品等の購入について検討
受賞記念展示案を十月頃を目途に研究
③　収蔵庫取りこわしについて
現状を写真・図面等で記録し、礎石を残しておく。
④　その他
所報の送付先について
五十八年度第一回（58・6・28）
一　報告
①　人事異動
主計課長　七野二郎氏離任（東京農工大へ）　木下舜春課長着任
管財係長　安藤信也氏離任（用度係長へ）　森嶋正徳係長着任
管理人　緒方廣之氏退職　平沢義一氏着任
②　公開展示の報告
期間中二、一八〇名の参観者があった。
五月中の参観者は七、四二二名
③　収蔵庫の撤去について
四月十九日に工事を行い、写真撮影および図面作成をした。
④　書籍寄贈受入
『日本美術年鑑（一九八一　東京国立文化財研究所）』ほか六冊
⑤　撮影申込
日本テレビより『美の世界』に収録、放送（58・7・16、58・7・23）のため、五浦の景観と建物内部の撮影申込があった。
⑥　茨城県博物館協会加入の件
茨城県歴史館長より加入の勧誘があった。検討する。
⑦　清水六兵衛作品の箱書について
七代六兵衛氏に箱書依頼のため、北岡所員を派遣する。
⑧　国華購入
2号〜　購入価格三万円
⑨　松喰虫防除
北茨城市に依頼した。
二　議事
①　奨学寄附金の使用計画について
記念行事、所員研修、補修、図書購入、展示ケース、ボストン美術館調査等の案が出た。
記念展示（10・24〜26　図書館）を決定。細案は後藤・河内ほかによって企画する。
第二回（58・9・27）
一　報告
①　管理人の死去について
六月三十日　管理人平沢義一氏が死去。七月三日の葬儀に、経理部長と所長が出席。

後任は小泉道朝氏（62才　日立市役所退職）が七月二十五日より勤務。

②　六兵衛作品箱書完了

③　雑件

井戸の蓋、トイレの汚物入、松の消毒、清掃等

二　議事

①　学内の記念展示計画について

十月二十四日（月）正午より二十六日（水）午后五時まで搬入、撤去、搬出等について検討

②　要覧の印刷について

③　懇談会の開催について

学内展示の会期中　退官旧所員と現所員の懇談会を開催する。

十月二十五日（火）午后六時より　水戸駅前なかむら屋

第三回（58・10・13）

一　議事

①　収蔵品の学内展示および一般公開について

展示日程、展示物品、担当者ほか

第四回（59・2・7）

一　報告

①　海岸線の浸食防止について

主計課長より、護岸工事の必要性と工事中断の経緯について

所長より、学長視察に同行した工学部海洋学教官の意見によると防波堤、模擬岩、テトラポットが効果的

②　北茨城市美術館建設について

北茨城市の構想は、財団法人とし発起人に知事、市長、学長、いはらき新聞社長、伊藤氏（敷地提供者）、財界関係者を考慮、展示品は五浦美術文化研究所収蔵品を貸与希望

所員会議では協力できないという意見が中心

③　六角堂附近の破損等

敷地内の地盤に穴があき、瓦（雀止まり）が落下した。

一　議事

①　所長の選出について

四月に所員が選出されるのを待って所長選出をすることとし、新所長が決定するまでは、現所長が職務を継続するものとする。

②　郷土文化賞金の使用について

現在までの使用状況の確認と、使途案の検討

③　閉館時間の延長について

地元から研究所公開時間延長の要望が強いので、三月～十月まで土・日について閉館を十六時とする。

五十九年度第一回（59・4・13）

一　報告

①　所員の変更

退所　黒沢博所員　赤尾憲一所員

入所　中川浩一所員（教育　社会）　神崎繁所員（人文　史学）

②　管財係員の異動

金田富雄氏 ↓ 理学部会計係へ

栗田稔氏 ↑ 教育学部会計係より

二　議事

① 所長の選出について
投票日（十九日～二十五日十一時まで） 開票日（二十五日正午）
確認（二十五日十二時半所員会議）等を決定
② 五月の定期公開について
日程・担当者を決定
③ 各部部長の決定
研究部長・森所員、資料部長・河内所員、編集部長・後藤所員
④ その他
賞金残額の使途について。 各部の計画について。

臨時（59・4・25）
一 報告
① 所長選挙結果の報告について
所員総数21名中投票16名 西田所員13票 河内所員2票 北岡所員1票
5月10日部局長会議後、運営委員会を開催して正式決定する。
二 議事
① 所員の各部所属について決定
② 収蔵品目録、所報の発行について
五月中に資料部、編集部合同会議を開く
③ 学内展示について検討

第三回（59・7・17）
一 報告
① 物品の寄付受入れについて
奥原晴湖筆『梅花半開』 清水秀樹氏より寄付
② 樹木消毒について
五浦の研究所構内の樹木の消毒が、高萩営林署による空中散布2回、北茨城市役所による地上散布が2回行なわれた。
③ 最近の入場者について
（後段記録の通り）
一 議事
① 所報10号の発行について
天心遺跡が茨大に移管されてから三十年になるので、研究所の歴史を振り返る意味の内容を中心とし、旧所員にも原稿を依頼する。発行日を六十年一月五日とし、原稿〆切を十月五日とする。
② 収蔵品収納のため物品棚を購入する。
③ 岡倉天心全集購入（六万円）
④ 展示パネルの購入
右三件について検討

第四回（59・9・24）
一 報告
① 学報に五浦紹介記事執筆（河内）
② 入学案内に五浦の紹介をする。
二 議事
① 所報の件（後藤所員急用欠席のため審議なし）
② 秋期定期公開について
十一月三～五日（二日搬入、六日搬出）決定
担当者を決定

③　学内展示

十月二十九～三十一日案　十一月七～九日案　検討　後者に決定

第五回（59・10・18）

一　報告

①　物品棚二台購入　倉庫内に設置

②　ＮＨＫ大阪支局による研究所の撮影

十月十日撮影　十一月二十九日放映『わたしたちの歴史―フェノロサと天心』ＮＨＫ教育テレビ

③　秋期一般公開の日程および担当者

④　所報十号の原稿到着（石原・大谷・大道）

発行は一ケ月程度遅れる見込

⑤　主計課長異動

新課長　室欄工業大より平野克己氏

⑥　事務局長異動

新局長　奥野茂良氏

⑦　その他

小平市に平櫛田中記念館オープン（十月二十五日）

二　議事

①　定期公開の担当について

②　学内展示の準備について

(5)　所員研究会

昭和五十九年度第一回（59・10・18）

明治時代の図画教科書における引用について　金子一夫所員

(6)　その他

①　資料点検（59・3・26～27）

収蔵品を事務局会議室に運び、台帳と照合し、現状調査（特に破損箇所の記録）、写真撮影を実施した。

②　収蔵品目録刊行

本研究所の収蔵品のうち、定期公開時に展示される機会の多い物品を主として、写真および解説をつけた目録（Ｂ５判40ページ）を、収蔵品目録Ｉとして発行した。（57・11・3）

③　所報９号発行

岡倉天心生誕百二十年記念特集号（Ｂ５判164ページ）を発行した。（57・12・26）　なお前記の収蔵品目録Ｉを附録として合冊した。

④　五浦美術文化研究所参観者数調

| 年度／月 | 57　年　度 | 58　年　度 |
|---|---|---|
| 4 | 4,462人 | 727人 |
| 5 | 9,941 | 6,922 |
| 6 | 5,810 | 4,266 |
| 7 | 5,878 | 965 |
| 8 | 10,071 | 9,045 |
| 9 | 5,603 | 4,485 |
| 10 | 8,407 | 5,996 |
| 11 | 6,040 | 6,367 |
| 12 | 2,980 | 2,225 |
| 1 | 3,993 | 2,864 |
| 2 | 4,316 | 2,448 |
| 3 | 4,334 | 3,754 |
| 計 | 71,835人 | 50,064人 |

## 茨城大学五浦美術文化研究所所員名簿

所長　西田亨（教育、美術・絵画）

所員（所属学部、所属教室・担当学科目・専攻の順）

研究部

森　啓（部長、教養・哲学）
北岡甲子郎（人文、経済・財政学）
西村　道一（人文、日本文化論・日本思想史）
前田　光夫（教育、社会・法律学）
中川　浩一（教育、社会・社会科教育）
菊池龍三郎（教育、社会・教育社会学）
金子　一夫（教育、美術・美術科教育）
鶴間　和幸（教養、歴史学・中国史）

資料部

河内　八郎（部長、人文・日本文化論・日本史）
茂木　雅博（人文、比較文化論・博物館学）
鈴木　暎一（教育、社会・歴史学）
山崎　猛（教育、美術・美術科教育）
松田　正巳（教育、美術・構成）
寺本　輝正（教育、美術・構成）

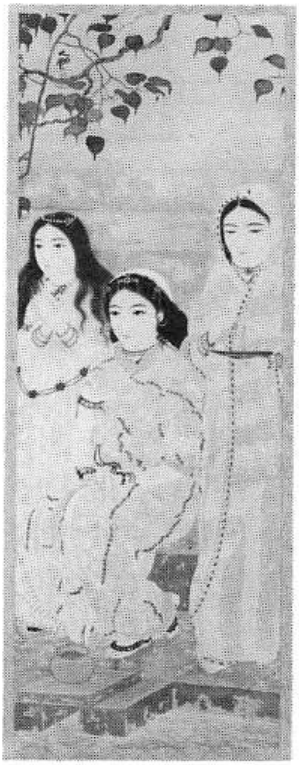
編集部

後藤　末吉（部長、教育・美術・彫塑）
神崎　繁（人文、ヨーロッパ論・哲学）
川又　正（教育、国文・書道）
小紫　重徳（教育、英文・英語学）
十河　雅典（教育、美術・構成）
森田　義之（教育、美術・絵画）

## 横山大観展準備進む

県内で過去に開かれた横山大観展では比較にならない、本格的な大観展が、県立美術博物館（水戸市千波町久保　県民文化センター内）で、開かれようとしている。大観の初期から晩年までの代表作約五十点を一堂に会するもので、『無我』『瀟湘八景』、重要文化財指定の『生々流転』などが出品されるほか、県立美術博物館収蔵のものとしては『流燈』『朝霧』『春（山に因む十題）』などが予定されている。会期は、昭和六十年五月三日（金）より同三十日（木）で、十六日（木）が休館となる。

展覧会期中の五月十一日（土）には、美術評論家の高階秀爾氏の講演会が開催されることになっている。



流燈

## あとがき

五浦の天心遺跡が茨城大学に移管されて、ちょうど三十年になる。それを記念する意味を含めて、所報十号の発行を企画した。岡倉天心偉績顕彰会から寄附を受けた当時の五浦は、土地も建物も荒廃が著しく、移管後の三十年は、そのまま修復の歴史であると言っても良い。初期の数年は、『五浦研究所』の名称を冠したものの、管理を事務局が掌握するだけで、研究所員はいなかった。『五浦美術研究所』と名称が変更になり研究所員が選ばれてのちも、管理の問題が最重点課題であったことに変りはなかった。その苦しい時代の所員、いわば基礎作りに苦労された先輩は、この三月で退官する西田所長を最後として、学外から五浦を見守ることになる。今回の所報も、その意味で、退官した所員の先輩に寄稿をお願いした。五浦を思う気持が、いつも変らぬことに、深い敬意と感謝を捧げるものである。

天心遺跡は、単に茨城大学の施設に留まらず、全国民的な視野で考えねばならない文化遺産である。社会にサービスする機能を大きくもつこのような研究施設は、他には例が少いであろう。その機能を維持しながら、研究面の充実を図ることが、今後の大きな課題となるだろう。研究面の端的な現れは所報にある。今回は執筆予定者が、健康面その他で、原稿が間に合わず、いささか淋しい号となったが、次回の充実を期したいものと思う。今回もレイアウトは、十河所員にご苦労を願った。

（後藤記）


茨城大学五浦美術文化研究所報

第十号　一九八五

昭和六十年三月二十六日発行

編集責任者　茨城大学五浦美術文化研究所

連絡先　水戸市文京二―一―一　茨城大学管財係

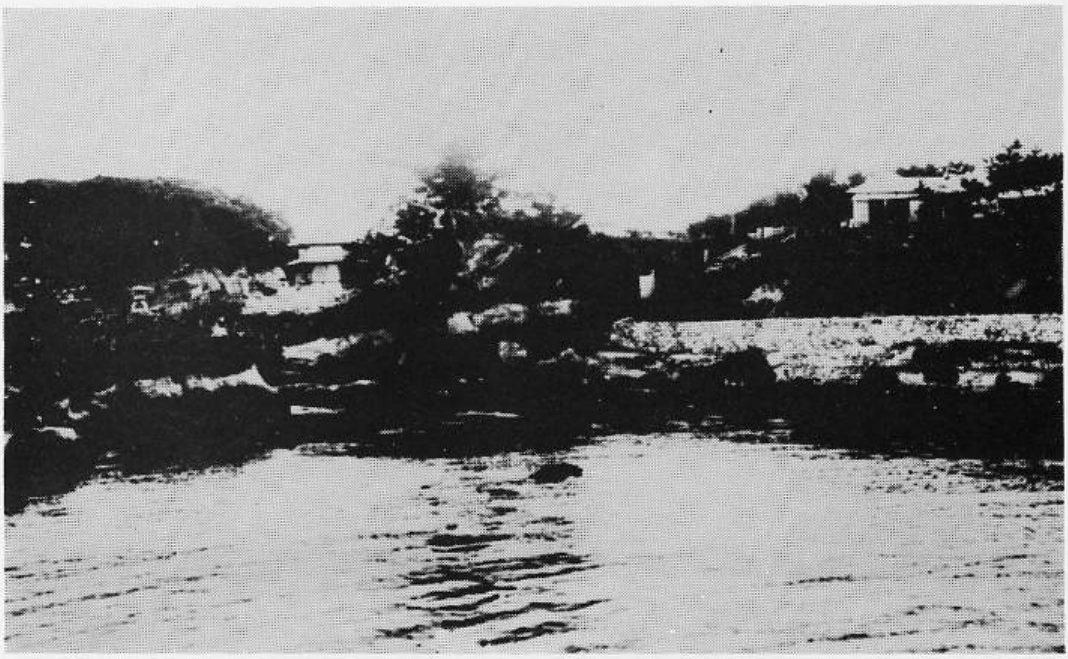
電話　〇二九二―二六―一六二一（代）

天心遺跡所在地　北茨城市大津町五浦五二七―二

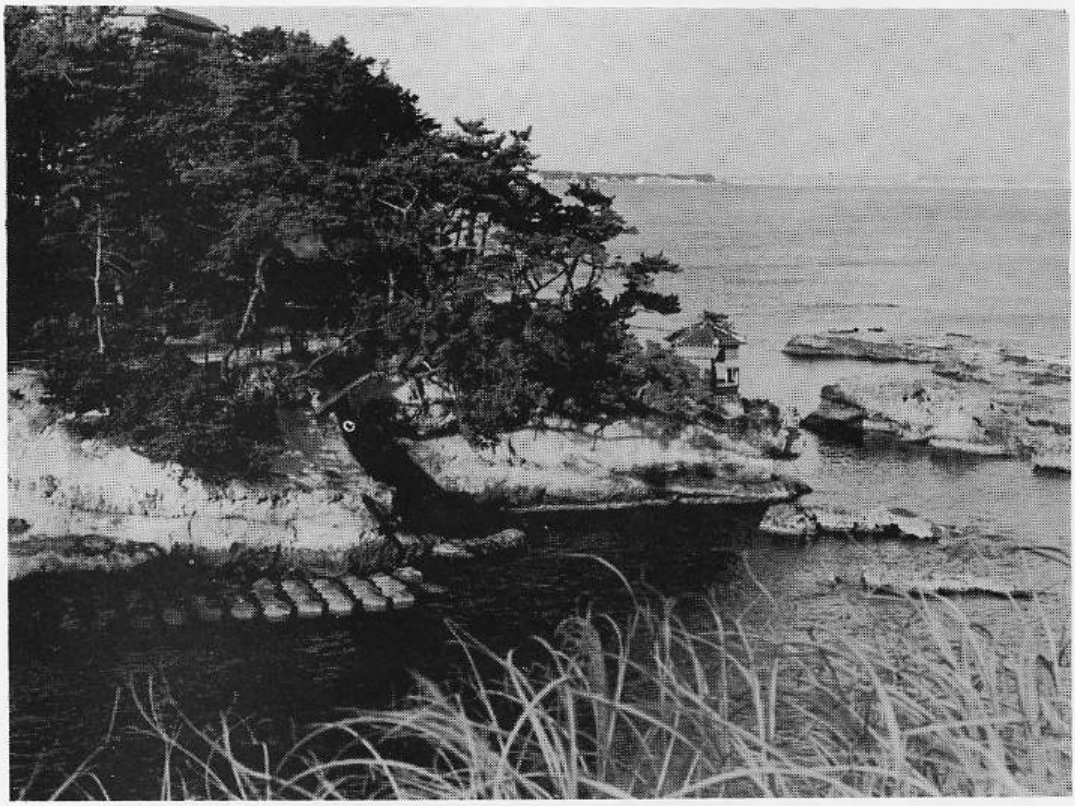
印刷所　（有）後藤プリント

水戸市曙町七―一八

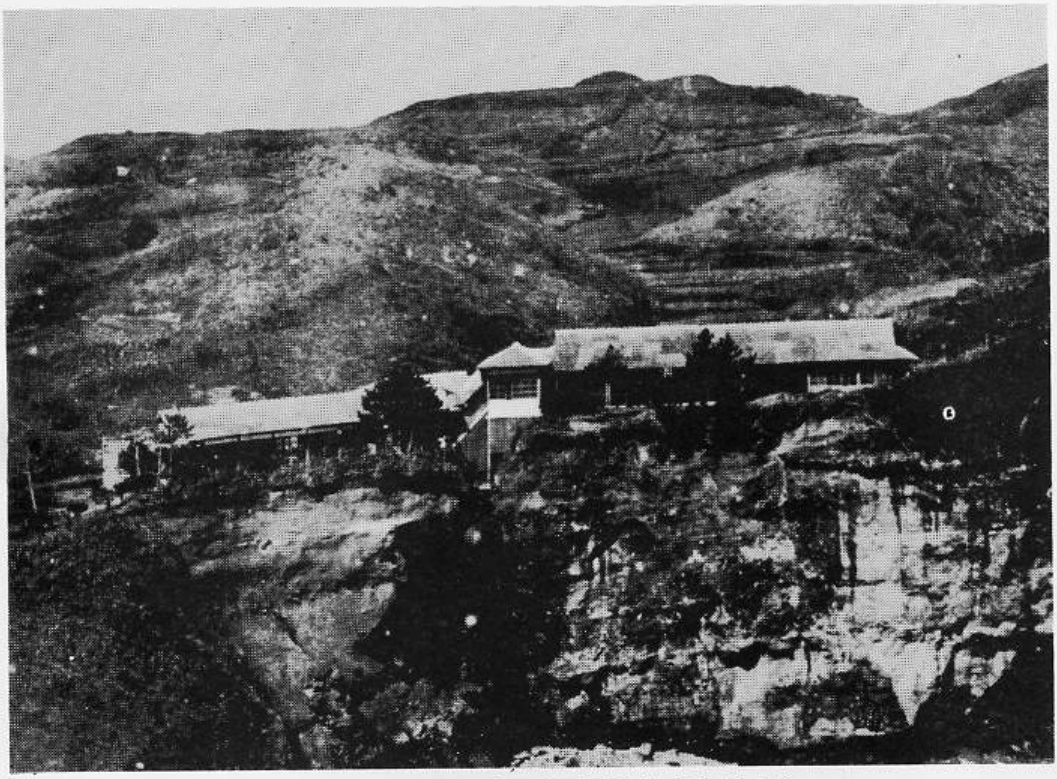
電話　〇二九二―五一―五八六〇（代）



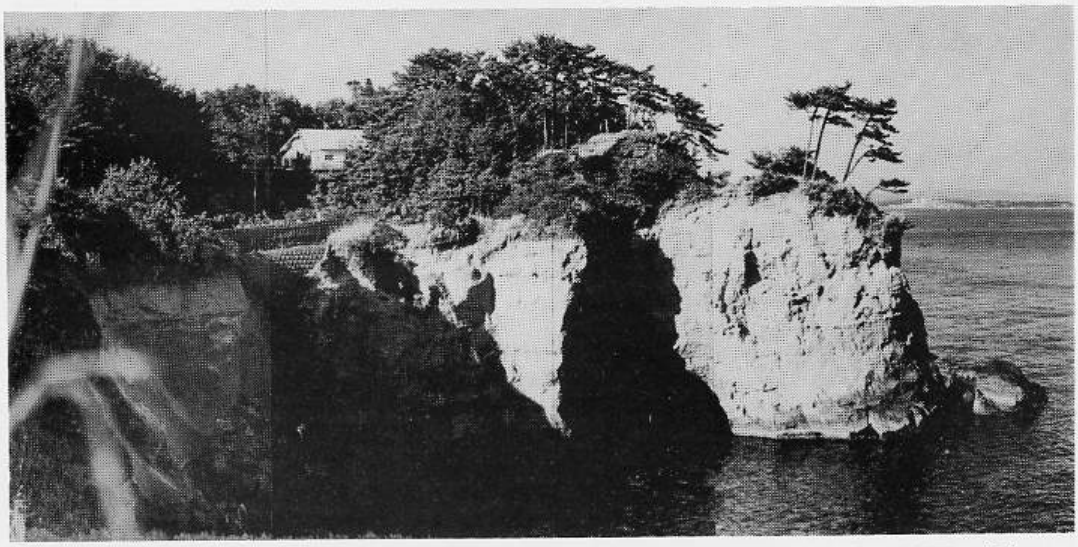
大五浦湾から見た六角堂と天心邸離室（明治40年代か）



展望台より六角堂を望む



五浦時代の日本美術院研究所（明治40年代か）



南側から見た研究所跡（建物の手前に日本美術院跡の碑が見える。右は蛇頭の岬）

# 目次


扉

口絵　大五浦湾から見た天心邸離室
　　展望台より六角堂を望む
　　五浦時代の日本美術院研究所
　　南側から見た研究所跡

第十号発刊のことば　……西田　亨……1
ウォーナー博士の功績をめぐる異説について……稲村退三……2
五浦の松濤
　―茨大五浦美文研三十周年によせて―……石原道博……5
天心の墓に詣でたこと　……大谷時中……7
『岡倉天心』の著者
　斎藤隆三先生の思い出　……瀬谷義彦……9
新納資料のこと　……大道武男……11
岡倉天心の美意識とその遺品　……荒木　修……13
研究所の思い出をめぐって　……岡田忠軒……15
五浦美術文化研究所報十号への足跡　……後藤末吉……17
既刊所報目次　……19

五浦と天心　……後藤末吉……26
茨城大学五浦美術文化研究所
　三十年の経緯を顧みて　……西田　亨……62
彙　報　……64
茨城大学五浦美術文化研究所所員名簿　……69
横山大観展準備進む　……69
あとがき　……70

六角堂棟札